

茨城県教育財団文化財調査報告第91集

# 茨城県県西生涯学習センター 建設用地内埋蔵文化財調査報告書

野殿深作遺跡

平成6年6月

茨城県教育委員会  
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第91集

# 茨城県県西生涯学習センター 建設用地内埋蔵文化財調査報告書

の どの ふかさく  
野殿深作遺跡

平成6年6月

茨 城 県 教 育 委 員 会  
財団法人 茨城県教育財団

# 序

近年、所得水準の向上、自由時間の増大、高齢化社会の進行、絶えまない科学技術の高度化や情報化、国際化の進展など、県民をとりまく社会環境が大きく変化しています。

このように、絶えず進展する社会にあつて、県民一人一人が真に豊かな生活を営むため、生涯を通じて自ら学習することによって、社会の変化に対応し、充実した人生を送るために生涯を通じての学習に高い関心を示し、学習機会の拡充をはじめ様々な援助を求めています。県は、このような生涯学習を取り巻く動向を踏まえ、県民の学習活動が体系的効果的に行うことができるよう、茨城県生涯学習推進計画「学びいばらき、いきいきプラン」を策定し、その推進に努めてきました。このプランを推進するため、県西地域県民の生涯学習活動を支援する施設として、茨城県県西生涯学習センターを建設することになりましたが、その予定地内に埋蔵文化財包蔵地である野殿深作遺跡が所在しております。

この度、財団法人茨城県教育財団は、茨城県教育委員会から埋蔵文化財発掘調査について委託を受け、平成5年7月から平成5年9月にかけて茨城県県西生涯学習センター建設用地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は、野殿深作遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な資料としてはもとより、教育、文化向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

なお発掘調査および整理にあたり、委託者である茨城県教育委員会はもとより、下館市教育委員会をはじめ、関係各機関から御指導、御協力を賜りましたことに対し、深く感謝の意を表します。

平成6年6月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 磯田 勇

## 例 言

1 本書は茨城県教育委員会の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成5年7月から同年9月まで実施した野殿深作遺跡の調査報告書である。

遺跡の所在地は、下館市大字野殿字深作1,391ほかである。

2 野殿深作遺跡の調査・整理に関する教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	磯 田 勇	昭和63年6月～	
副 理 事 長	角 田 芳 夫 小 林 秀 文	平成3年7月～平成6年3月 平成6年4月～	
専 務 理 事	中 島 弘 光	平成5年4月～	
事 務 局 長	藤 枝 宣 一	平成4年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長	安 藏 幸 重	平成5年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長 代 理	河 野 佑 司	平成6年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	水 飼 敏 夫	平成4年4月～
	係 長	根 本 達 夫	平成6年4月～
	主 任 調 査 員	川 井 正 一	平成5年4月～平成6年3月
	主 任 調 査 員	海 老 澤 稔	平成6年4月～
	主 事	杉 山 秀 一	平成4年4月～平成6年3月
経 理 課	課 長	小 幡 弘 明	平成5年4月～
	課 長 代 理	鈴 木 三 郎	平成5年4月～
	係 長	大 高 春 夫	平成6年4月～
	主 任	飯 島 康 司	平成4年4月～平成6年3月
	主 事	軍 司 浩 作	平成5年4月～
調 査 課	課長(部長兼務)	安 藏 幸 重	平成5年4月～
	調 査 第 四 班 長	和 田 雄 次	平成5年度
	主 任 調 査 員	小 島 敏	平成5年7月～平成5年9月調査
	調 査 員	樫 村 宣 行	平成5年7月～平成5年9月調査
整 理 課	課 長	阿久津 久	平成5年4月～
	主 任 調 査 員	小 島 敏	平成6年4月～平成6年6月整理・執筆・編集

3 本書の作成にあたり、遺物については、栃木県立博物館学芸部橋本澄朗氏、宇都宮市教育委員会文化課梁木誠氏、栃木県埋蔵文化財センター調査部田代隆氏に御指導をいただいた。

4 本書に使用した記号等については、第3章第1節の3「遺構・遺物の記載方法」の項を参照されたい。

5 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

6 遺跡の概略

フリガナ	イバラキケンケンセイショウガイガクシュウセンターケンセツヨウチナイマイゾウブンカザイチョウサホウコクショ						
書名	茨城県県西生涯学習センター建設用地内埋蔵文化財調査報告書						
副書名	野殿深作遺跡						
巻次							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第91集						
編著者名	小島 敏						
編集機関	茨城県教育財団						
所在地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 ☎0292-25-6587						
発行年月日	西暦 1994（平成6）年6月30日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
のどのふかさくいせき 野殿深作遺跡	しもだてしおおあざの 下館市大字野 どのあざふかさく 殿字深作1391 ほか 外	08206-	36度 16分 30秒	139度 58分 10秒	19930701 ～ 19930930	3094	茨城県県西生涯学習センター建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
野殿深作遺跡	集落跡	古墳時代 (中期)	住居跡	4軒	土師器 須恵器 石製品		樽形甕片出土
		中世	地下式墳 井戸 溝	9基 2基 2条	土師質土器 陶磁器 石製品		

# 目 次

序

例言

第1章 調査経緯 .....	1
第1節 調査に至る経過 .....	1
第2節 調査経過 .....	1
第2章 位置と環境 .....	3
第1節 地理的環境 .....	3
第2節 歴史的環境 .....	3
第3章 遺跡 .....	8
第1節 調査方法と遺構・遺物の記載方法 .....	8
1 地区設定 .....	8
2 基本層序の検討 .....	8
3 遺構・遺物の記載方法 .....	9
第2節 遺跡の概要 .....	9
第3節 遺構と遺物 .....	10
1 竪穴住居跡 .....	10
2 地下式墳 .....	22
3 土坑 .....	36
4 井戸 .....	40
5 溝 .....	42
6 遺構外出土遺物 .....	43
第4節 まとめ .....	45

写真図版

## 插图目次

第1图	野殿深作遺跡調査区	2	第18图	第3・4号地下式壙実測図	26
第2图	周辺遺跡分布図	6	第19图	第4号地下式壙出土遺物実測図	27
第3图	野殿深作遺跡地形図	7	第20图	第5・6号地下式壙実測図	28
第4图	調査区呼称方法概念図	8	第21图	第5号地下式壙出土遺物実測・拓影図	29
第5图	基本土層図	8	第22图	第6号地下式壙出土遺物実測図	31
第6图	第1号住居跡実測・遺物出土位置図	11	第23图	第7号地下式壙出土遺物実測・拓影図	32
第7图	第1号住居跡出土遺物実測図(1)	12	第24图	第8・9号地下式壙, 第1・2号井戸実測図	33
第8图	第1号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)	13	第25图	第8号地下式壙出土遺物実測図	34
第9图	第2号住居跡実測・遺物出土位置図	15	第26图	第9号地下式壙出土遺物実測図	35
第10图	第2号住居跡出土遺物実測図(1)	16	第27图	第4号土坑出土遺物実測図	36
第11图	第2号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)	17	第28图	土坑実測図(1)	37
第12图	第3号住居跡実測図	20	第29图	土坑実測図(2)	38
第13图	第3号住居跡出土遺物実測・拓影図	20	第30图	第1号井戸出土遺物実測・拓影図	41
第14图	第4号住居跡, 第7号地下式壙実測図	22	第31图	第1・2号溝断面・土層実測図	42
第15图	第4号住居跡出土遺物実測図	22	第32图	第1・2号溝出土遺物実測・拓影図	42
第16图	第1・2号地下式壙実測図	23	第33图	遺構外出土遺物実測・拓影図	44
第17图	第2号地下式壙出土遺物実測図	24	附图	野殿深作遺跡遺構配置図	

## 表目次

表1	野殿深作遺跡周辺遺跡一覧表	5	表3	土坑一覧表	39
表2	住居跡一覧表	22			

## 写真図版目次

PL 1	野殿深作遺跡全景	PL 12	上第1号土坑全景, 中第4号土坑全景, 下第10号土坑全景
PL 2	上遺跡全景(北東から), 下地下式壙全景	PL 13	第8・9号地下式壙・第1・2号井戸全景
PL 3	上第1号住居跡全景, 下第1号住居跡遺物出土状況	PL 14	上第8・9号地下式壙遺物出土状況, 中・下第8号地下式壙, 第1号井戸断面
PL 4	第1号住居跡遺物出土状況(1)	PL 15	第1号溝全景
PL 5	第1号住居跡遺物出土状況(2)	PL 16	第1号住居跡出土土器(1)
PL 6	上第2号住居跡全景, 下第2号住居跡遺物出土状況	PL 17	第1号住居跡出土土器(2)
PL 7	上第3号住居跡全景, 下第3号住居跡遺物出土状況	PL 18	第1(i9)・2号住居跡出土土器(1~9)
PL 8	上第4号住居跡・第7号地下式壙全景, 下第1・2号地下式壙全景	PL 19	第2号住居跡出土土器
PL 9	上第3号地下式壙全景, 下第4号地下式壙全景	PL 20	第2号住居跡(12~16), 第1号井戸(5・6)・遺構外(1・4)出土土器
PL 10	上第5号地下式壙全景, 下第6号地下式壙全景	PL 21	第8号地下式壙出土土器, 各遺構出土土器片
PL 11	上第5号地下式壙断面, 中第6号地下式壙断面, 下第5・6号地下式壙断面	PL 22	須惠器片, 石器, 石製品
		PL 23	各遺構出土遺物(石器・石製模造品・金属製品・古銭・土製品), 作業風景

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経過

近年、県民をとりまく社会環境が大きく変化し、生涯学習への関心が高まり、地域や職場等において個人やグループが多様な学習活動をしている。県は、このような県民の学習活動が体系的効果的に行うことができるよう、茨城県生涯学習推進計画を策定し、県内に生涯学習を推進するための施設を建設している。

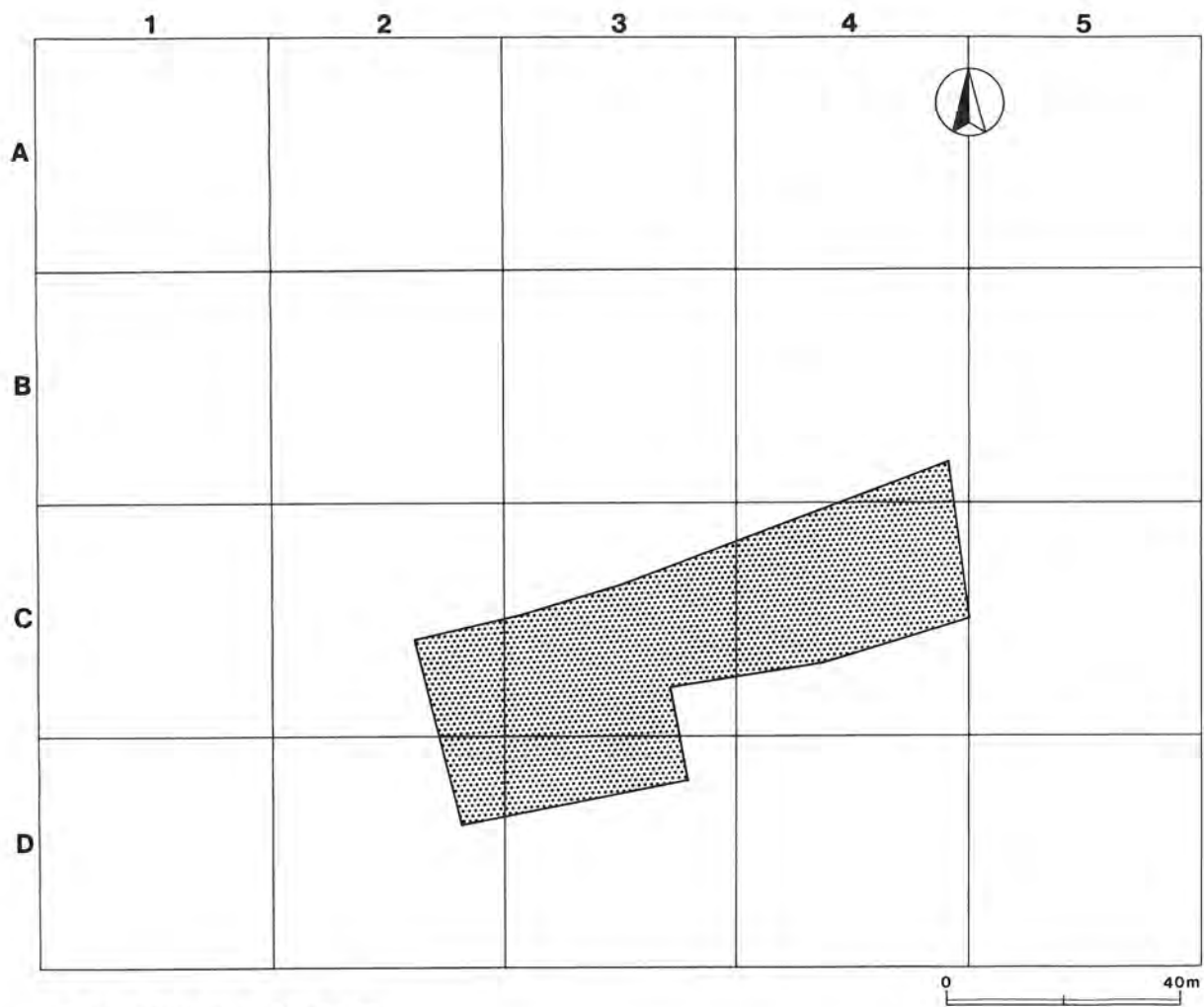
以上のような背景をもとに、下館市野殿深作地区に、茨城県県西生涯学習センターの建設が計画された。工事に先立ち、平成4年12月に茨城県教育委員会生涯学習課は、茨城県教育委員会文化課に工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無及びその取り扱いについて照会した。これに対し、文化課は、平成4年12月に現地踏査・試掘調査を実施し、工事予定地内に野殿深作遺跡の存在を確認した。文化財保護の立場から埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた結果、現状保存が困難であるとし、記録保存の措置を講ずることとなり、平成5年2月に調査機関として茨城県教育財団が紹介された。茨城県教育財団は、茨城県教育委員会と埋蔵文化財発掘調査に関する業務委託契約を締結し、平成5年7月1日から野殿深作遺跡の調査を実施することとなった。

## 第2節 調査経過

野殿深作遺跡の発掘調査は、平成5年7月1日から平成5年9月30日の3か月にわたって実施した。以下、調査の経過についてその概要を記述する。

- 7月前半 野殿深作遺跡の発掘調査に必要な事務所や現場倉庫の設置、調査器材搬入、及び作業員の雇用を行った。14日には発掘調査の円滑な推進と作業の安全を願って、関係各位の出席のもとに鉄入れ式を挙行了した。
- 7月後半 調査前の全景写真を撮影し、調査区内にトレンチを設定し試掘調査を行った。
- 8月前半 トレンチ発掘による遺構確認調査の結果、調査エリアの西側から住居跡が確認できたので、重機による表土除去を行い、併せて遺構確認作業を行った。その結果、竪穴住居跡4軒、土坑45基、溝3条を確認した。
- 8月後半 第1号住居跡から調査を開始した。第1号住居跡・第2号住居跡からは、多量の土師器が出土した。ひきつづき土坑・溝の調査を始めた。8月下旬には台風が到来するなど、作業を中止することが多かった。
- 9月前半 大型土坑の調査に移った。遺構の全容がなかなかつかめないうえに、出土遺物や土坑の形態から、中世の地下式墳であることが判明した。
- 9月後半 17日には調査を終了し、補足調査にはいった。20日に遺跡の航空写真を撮影した。25日には現地説明会を開催し、遺構・遺物を一般に公開した。28日までに埋め戻し及び安全対策を実施し、30日には現地調査を完了した。





第1図 野殿深作遺跡調査区



遺構確認状況

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

野殿深作遺跡は、茨城県下館市大字野殿に所在し、下館市役所の南南西約2kmに位置している。

遺跡のある下館市は、茨城県の西部に位置し、北は栃木県芳賀郡二宮町、東は真壁郡協和町、南は同郡明野町、同郡関城町、西は結城市、栃木県小山市に接している。

下館市の地形は、洪積台地である南北にのびる下館台地と、下館台地を挟むように東側に小貝川水系（小貝川、五行川、大谷川）と西側に鬼怒川が流れており、この沖積低地からなっている。下館台地は、下館付近で大谷川低地によって二分され、大谷川低地の東側の台地は北へのび、栃木県真岡付近より宝積寺にわたる宝積寺台地に続く。下館市街地は、五行川右岸からこの台地上へと展開している。また、大谷川西岸の台地は、より広く南へのび、その南端は下妻市街地付近にある。下館台地は、下館市街地北方の中館付近で47mと高く、南の野殿付近で37m、南端の大宝城跡付近では29mと、北から南へと高度が低下している。

下館台地は、南北に侵食する谷が何条も入り、台地が分断されている。さらにこれらの谷から派生する支谷によっても、台地が分断され、かなり複雑な地形となっている。

台地の地層は、第四期洪積世成田層を基盤として成田下層、成田上層、黄褐色砂や黄褐色粗砂を含む龍ヶ崎砂礫層、その上に灰白色の粘土層である常総粘土層、そして、表土の下を厚く覆う赤褐色の関東ローム層がのる。

野殿深作遺跡は、下館台地東側縁辺部に位置している。台地の東側は低地になっており、台地縁辺部に沿うように大谷川が流れ、その流れもまもなく小貝川に合流する。この低地は水田として利用されている。遺跡の標高は34m～37mで、低地との比高は10mほどである。調査前の現況は畑地、荒地である。

### 第2節 歴史的環境

小貝川、五行川、大谷川、鬼怒川などの水運に恵まれた下館市には、「茨城県遺跡地図<sup>(1)</sup>」によれば多くの遺跡が分布しているが、まだ発掘調査例は少ない。特に、河川に近い台地上には、各時代にわたる人々の生活の跡が認められる。ここでは、下館市及びその周辺の遺跡について、時代をおって概観することにする。

旧石器時代の遺跡<sup>(2)</sup>は、今のところ未確認であるが、小貝川の上流にある協和町城山遺跡から頁岩製剥片が出土している。

縄文時代の遺跡は、鬼怒川左岸や大谷川右岸の台地上に、数多く見られる。女方本田前遺跡<4>は縄文時代・弥生時代・古墳時代の複合遺跡である。縄文時代は、早期から晩期にわたる遺物が出土している。稲荷台式、関山式、諸磯式、堀之内式、加曾利B式、曾谷式、安行I・II式、安行III a・b式、大洞B-C式、亀ヶ岡式等の土器や、石器・石鏃・土製品が多数出土する。前期の遺跡は、十二天遺跡<2>がある。この遺跡からは、関山式、諸磯式にかけての土器片が採取されているが、現在は湮滅している。中期の遺跡は、前原遺跡<13>、大関遺跡<sup>(3)</sup>などがある。これまでの遺跡が台地上に立地しているのに対し、大関遺跡は小貝川右岸の低地に立地しており、遺跡の性格を考えるうえで、興味深い遺跡である。中期・後期・晩期の遺跡は、女方裏遺跡<12>、外塚遺跡<19>などがある。外塚遺跡は、昭和56年に下館市教育委員会により発掘調査が実施されて

いる。外塚遺跡も、大谷川左岸の低地に立地している。遺跡からは、称名寺Ⅰ・Ⅱ式、堀之内Ⅰ・Ⅱ式、加曾利B式、安行Ⅰ・Ⅱ式の土器が多量に出土している。遺構は、土坑が確認されただけであった。その外の遺跡として、<sup>(15)</sup>元坪遺跡<15>、<sup>(14)</sup>不動坂遺跡<14>、<sup>(22)</sup>関城町船玉遺跡<22>、<sup>(26)</sup>西原遺跡<26>などがある。

弥生時代の遺跡は、中期前半の標式土器となった<sup>(4)</sup>女方遺跡<3>がある。当遺跡は、昭和14年から3年間にわたり発掘調査が行われ、土壙41基と数基の埋甕、および土器包含層が確認されている。特に、15号土壙から出土した人面付壺型土器は、耳・目・鼻・口が粘土紐によって表現されており、優品として著名である。遺構の性格は、再葬墓と考えられている。現在出土した遺物は、東京国立博物館が所蔵している。後期の遺跡としては、鬼怒川左岸に十二天遺跡、女方本田殿遺跡、女方裏遺跡、前原遺跡が、大谷川右岸には不動坂遺跡、五行川右岸には、<sup>(10)</sup>八丁台遺跡<10>などが確認されている。

古墳時代の遺跡は、市内には十二天遺跡、女方遺跡、女方本田前遺跡、<sup>(9)</sup>元村遺跡<9>、女方裏遺跡、前原遺跡、元坪遺跡など数多く確認されているが、調査例が少なく不明な部分が多い。今回調査した野殿深作遺跡の南南東約1.5kmの関城町には、<sup>(5)</sup>仲道遺跡<27>がある。平成3年に関城町教育委員会により発掘調査が実施されている。仲道遺跡は、野殿深作遺跡と同じ台地上縁辺部に位置し、古墳時代中期の住居跡10軒、後期の住居跡11軒が確認されている。また同町<sup>(6)</sup>下木有戸遺跡<28>からは、古墳時代前期から中期にかけての住居跡が51軒確認されている。

下館市は、鬼怒川左岸を始め小貝川・五行川・大谷川の各河川台地上に、数多くの古墳<sup>(7)</sup>がある。小貝川と五行川の合流する左岸低地に<sup>(8)</sup>徳持古墳がある。平成3年に筑波大学により測量調査が行われ、前方部を南東に向けた前方後円墳で、全長140mと推定される。本格的な発掘調査が行われていないため、不明な点が多いが、5世紀前半の築造と推定される。また、北へ1kmには<sup>(8)</sup>島古墳<8>がある。小貝川左岸の台地上には、<sup>(16)</sup>北茂田古墳群、<sup>(16)</sup>南台古墳群などがある。鬼怒川左岸台地に移ると、<sup>(9)</sup>女方古墳群<11>がある。以前は、48基存在していたといわれるが、開発等で現存するのは3基である。その中で、昭和27年から28年にかけて日本大学考古学会により発掘調査された3号墳（<sup>(17)</sup>藤の越古墳）は、直径約24mの円墳である。礎を小口積みした石室より、人骨片と鉄器片を、墳丘をとりまく埴輪列より、円筒埴輪14・埴輪馬2・人物埴輪7体分が出土した。なかでも、1体の人物埴輪の眉間にあたかも<sup>(18)</sup>白毫のごとき円珠が加えられていた。女方古墳より北へ500mの地点に<sup>(16)</sup>弁天古墳群<16>が、南へ800mの関城町には県指定史跡である<sup>(19)</sup>船玉古墳群<20>がある。船玉古墳は一辺が約35mの方墳で、横穴式石室を持ち、壁画が赤色顔料で描かれているが判然としない。大谷川右岸には、今回調査した野殿深作遺跡の東約200mの地点に<sup>(11)</sup>不動坂遺跡がある。この遺跡は、縄文時代・弥生時代・古墳時代の複合遺跡であり、昭和50年に削土作業中に石棺が発見された。石棺には、人骨2体が合葬され、副葬品として鉄刀・刀子・鉄鏃・耳環等が出土した。石棺は、小さな石材を積み上げた構造を持っている。同時期の古墳として、<sup>(17)</sup>西方古墳<17>、<sup>(18)</sup>西方新田遺跡<18>、<sup>(19)</sup>富士東古墳<7>がある。

奈良・平安時代の遺跡は未確認であるが、律令下において、当市域は常陸国新治郡に属し、協和町には新治郡衙がおかれた。「新編常陸国誌」<sup>(22)</sup>によれば、当市域は、竹島郷・博多郷・沼田郷・伊讀郷に比定される。

中世に至っては、天永2（1111）年に藤原実宗が伊佐氏を名のり、伊佐城<6>を中心に勢力を張った。文明10（1478）年には、<sup>(23)</sup>水谷氏が結城氏より下館地方を与えられ、<sup>(24)</sup>下館城主<5>となり今日の下館市の基礎を築いた。

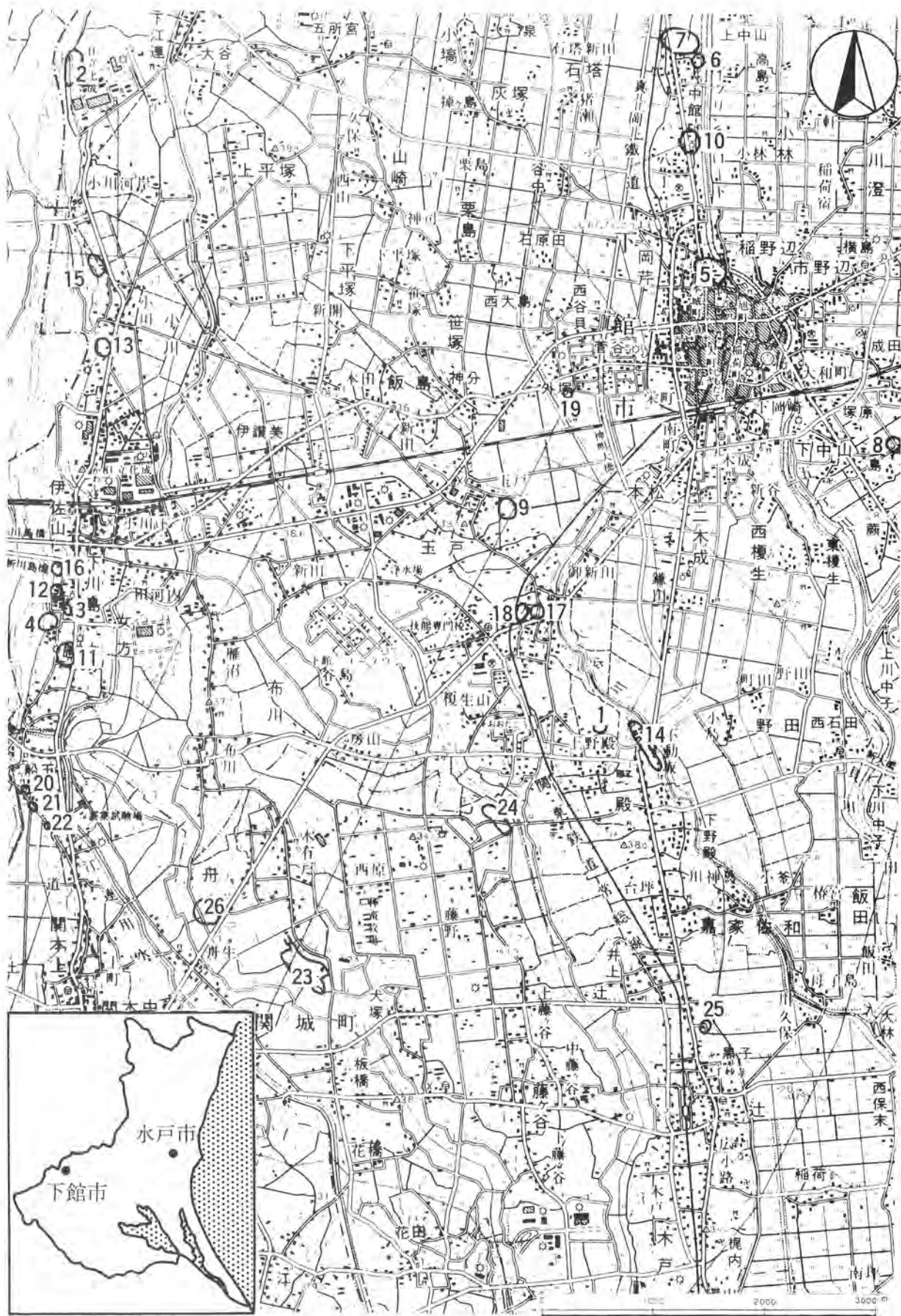
※遺跡名の次の< >内の数字は、表1・第2図の該当遺跡番号と同じである。

注・参考文献

- (1) 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地区』 1990年3月
- (2) 下館市教育委員会 『下館市史』 1968年3月
- (3) 下館市教育委員会 『外塚遺跡』 1985年3月
- (4) 茨城県『茨城県資料考古資料編 弥生時代』1991年3月  
 徳富武雄・中根君郎 「常陸国真壁郡伊讀村女方の土器」 『人類学雑誌』47-12 1932年12月  
 田中國男 「常陸女方遺跡の発掘について」 『古代文化』5 1942年5月  
 田中國男 『縄文式弥生式接触文化の研究』 1944年3月
- (5) 関城町教育委員会 『仲道遺跡発掘調査報告書』 1991年10月
- (6) 関城町教育委員会 『下木有戸遺跡発掘調査報告書』 1991年10月
- (7) 茨城県 『茨城県資料考古資料編 古墳時代』 1981年2月
- (8) 筑波大学 『古墳測量調査報告書I』 1991年3月
- (9) 八幡一郎 「茨城県真壁郡女方古墳群」 『日本考古学年報』5 1957年3月
- (10) 関城町教育委員会 『関城町史通史上巻』 1987年3月
- (11) 下館市教育委員会 『下館の文化財』 1992年3月
- (12) 白石正義 『新偏常陸国誌』 1979年12月

表1 野殿深作遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	県遺跡番号	時代				番号	遺跡名	県遺跡番号	時代			
			縄	弥	古	中世以降				縄	弥	古	中世以降
1	野殿深作遺跡	(当遺跡)			○	○	14	不動坂遺跡	2186	○	○	○	
2	十二天遺跡	2167	○	○	○		15	元坪古墳	2191	○	○	○	
3	女方遺跡	2168	○	○	○		16	弁天古墳	2195			○	
4	女方本田前遺跡	2169	○	○	○		17	西方古墳	4016			○	
5	下館城	2171				○	18	西方新田古墳	4017			○	
6	伊佐城	2172				○	19	外塚遺跡	5877		○		
7	富士東遺跡	2177			○		20	船玉古墳群	2212			○	
8	島古墳	2179			○		21	船玉遺跡	2216	○	○	○	
9	元村遺跡	2180		○	○		22	弁天山古墳	4030			○	
10	八丁台遺跡	2181		○			23	塚原古墳群	6101			○	
11	女方古墳群	2182			○		24	西原遺跡	6102	○		○	
12	女方裏遺跡	2183	○	○	○		25	仲道遺跡				○	
13	前原遺跡	2184	○	○	○		26	下木有戸遺跡				○	



第2図 周辺遺跡分布図



第3図 野殿深作遺跡地形図

# 第3章 遺 跡

## 第1節 調査方法と遺構・遺物の記載方法

### 1 地区設定

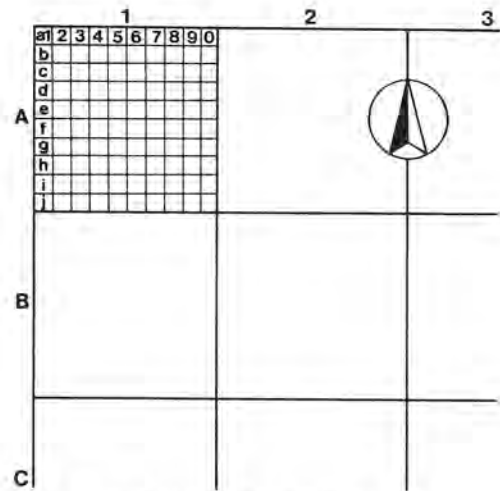
野殿深作遺跡の発掘調査を実施するに当たり、遺構及び遺物の位置を明確にするため調査区を設定した。

調査区の設定は、日本平面直角座標第Ⅱ系、X軸（南北）・Y軸（東西）を基準点として、40m方眼を設定し、この40m四方の区画を大調査区（大グリット）とした。さらに、この大調査区を東西、南北に各々十等分して、4m四方の小調査区（小グリット）を設定した。

調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用いて表記した。まず、大調査区の名称は、北から南へ「A」・「B」…、西から東へ「1」・「2」…とし、その組み合わせで「A1区」・「B2区」…のように称した。さらに、大調査区を4m方眼に、100分割した小調査区をそれぞれ同様に、北から南へ「a」・「b」…「j」西から東へ「1」・「2」…「9」・「0」と小文字を付した。

各小調査区の名称は、大調査区の名称と合わせて、「A1a<sub>1</sub>区」・「B2b<sub>2</sub>区」のように呼称した。

遺跡における基準点の座標は、(D3a<sub>1</sub>) X軸（南北）+ 30,520m、Y軸（東西）+ 12,200m



第4図 調査区呼称方法概念図

### 2 基本層序の検討

野殿深作遺跡においては、調査区西側C2f<sub>7</sub>区にテストピットを設定し、第5図に示すような土層の堆積状況を確認した。

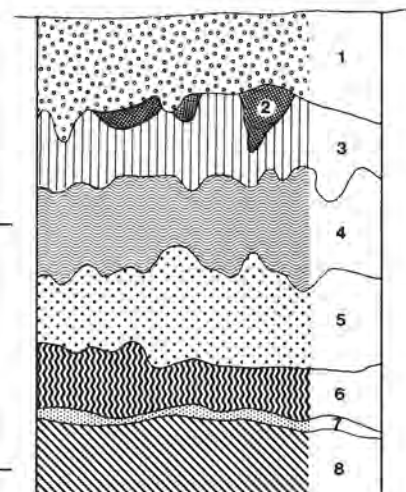
第1層は、灰褐色の耕作土であり、厚さは35~60cmである。第2層は、にぶい褐色のソフトローム層への漸移層であり、厚さは10~25cmである。第3層は、にぶい黄橙のソフトローム層であり、ローム粒子が中量混入しており、厚さは20~35cmである。第4層は、黒褐色の黒色バンドであり、厚さは20~50cmである。第5層は、にぶい黄褐色のハードローム層であり、粘性・締りとも強く、厚さは25~50cmである。第6層は、にぶい黄橙色の鹿沼パミスで、20~30cmの厚さである。第7層は、黄褐色の粘土層で、5cmほどである。第8層は、明るい黄褐色の粘土層である。

野殿深作遺跡の遺構は、表土下40~60cmほどの第3層上面から確認されている。

36.2m —

35.0 —

34.0 —



第5図 基本土層図

### 3 遺構・遺物の記載方法

本書における遺構及び遺物の記載方法は、以下のとおりである。

#### (1) 使用記号

遺構 住居跡-S I 土坑-SK 溝-SD 井戸-SE

遺物 土器-P 土製品-DP 石器・石製品-Q 古銭・金属製品-M 拓本土器-TP

#### (2) 遺構及び遺物の実測図中の表示



#### (3) 土層の分類

土層観察における色相の判定は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 日本色研事業株式会社）を使用した。

#### (4) 遺構・遺物実測図の作成方法と掲載方法

- ① 遺跡全体図は縮尺200分の1、住居跡・地下式壙・土坑は縮尺60分の1にした。
- ② 遺物は、原則として4分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に $S = 1/6$ 等と表示した。
- ③ 「主軸方向」は、炉を通る線を主軸とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。  
(例 N-10°-E N-10°-W)
- ④ 計測値は、A-口径 B-器高 C-底径 D-脚部径 E-脚部高 単位はcmである。なお、現存値は( )で、推定値は[ ]を付して示した。

#### (5) 遺構番号

遺構番号については、調査の過程において遺構の種別ごと・調査順に付したが、整理の段階で遺構でないかと判断したものは欠番とした。

#### (6) 遺物番号

遺物観察表の番号と、実測図・写真番号は一致する。

## 第2節 遺跡の概要

野殿深作遺跡は、下館市の南南西、小貝川、五行川、大谷川の流れる沖積低地の西側、標高約35mの台地縁辺部に立地する、古墳時代中期及び中世の複合遺跡である。調査前の現況は、畑・荒地で、今回の調査区域は東西に約95m、南北に約35m、面積3,094㎡である。

今回の調査によって確認された遺構は、古墳時代中期の竪穴住居跡4軒、中世の地下式壙9基、井戸2基、溝2条、その他に土坑22基が確認された。古墳時代中期の第2号住居跡からは樽形甕が出土している。中世の地下式壙は平面形が「□」型をしている。この地下式壙を取り囲むように、溝がめぐらされている。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に8箱ほど出土している。古墳時代の遺物は、坏・埴・鉢・高坏・樽形甕・甕・刀子・砥石等が出土している。中世の遺物は、内耳鍋・播鉢・石臼等が出土している。



## 第3節 遺構と遺物

### 1 竪穴住居跡

当遺跡からは、4軒の竪穴住居跡（古墳時代中期）が確認されている。住居跡は調査区の中央部に集中しており、耕作による攪乱があるものの遺構の保存状態も比較的良好である。以下、確認された住居跡の特徴や主な出土遺物について記載する。

#### 第1号住居跡（第6図）

**位置** 調査区の西部、C3i3区を中心に確認。

**規模と平面形** 長軸6.18m、短軸4.50mの長方形。

**主軸** N-19°-E。

**壁** 壁高は50～63cmで、外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦であるが、出入口付近を中心に南壁一帯に高まりがあり、硬く踏み固められている。出入口部の高まりと床との比高は約4cmである。

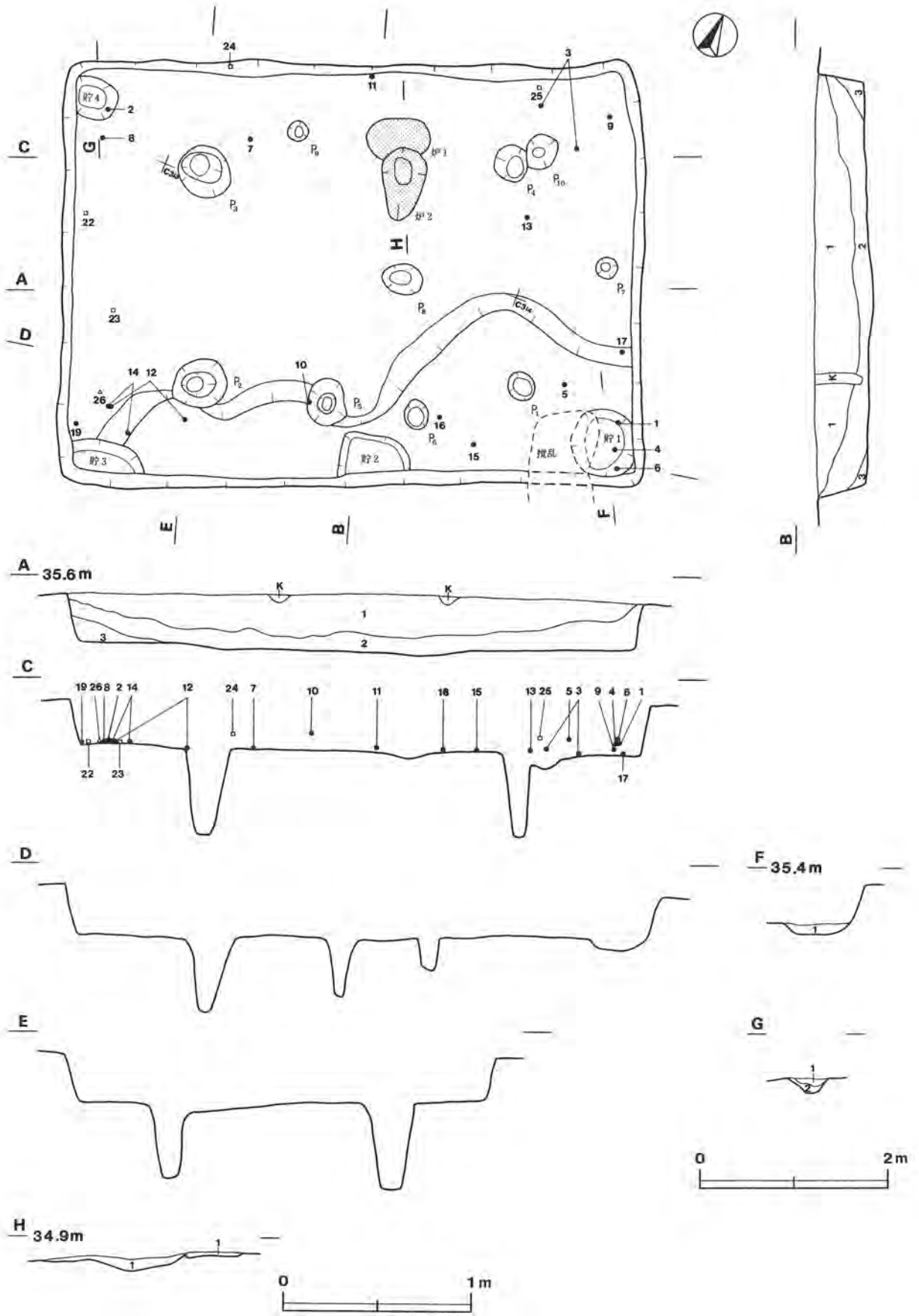
**ピット** 10カ所。P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>は長径32～61cm、短径28～51cmの円形または楕円形で、深さは63～92cmである。規模や配列から支柱穴と考えられる。P<sub>6</sub>は長径32cm、短径27cmの円形で、深さ36cmである。南壁中央部に位置しており、出入口施設に伴うピットと考えられる。P<sub>7</sub>～P<sub>9</sub>は長径24～43cm、短径22～33cmの円形で、深さは13～25cmである。補助柱穴と考えられる。P<sub>10</sub>は長径40cm、短径38cmの円形で、深さ13cmである。性格は不明である。

**炉** 主軸線上、北壁寄りに2基が一部重なり合って付設されている。第2号炉は、第1号炉の後に付設されている。第1号炉は長径70cm、短径50cmの楕円形で、床を3cmほど掘り窪めた地床炉である。覆土は1層で、焼土の大・小ブロック、焼土粒子を大量に含む暗赤灰色土である。第2号炉は長径78cm、短径48cmの楕円形で、床を6cmほど皿状に掘り窪めた地床炉である。覆土は1層で、焼土小ブロックを少量、焼土粒子を中量含む赤褐色土である。

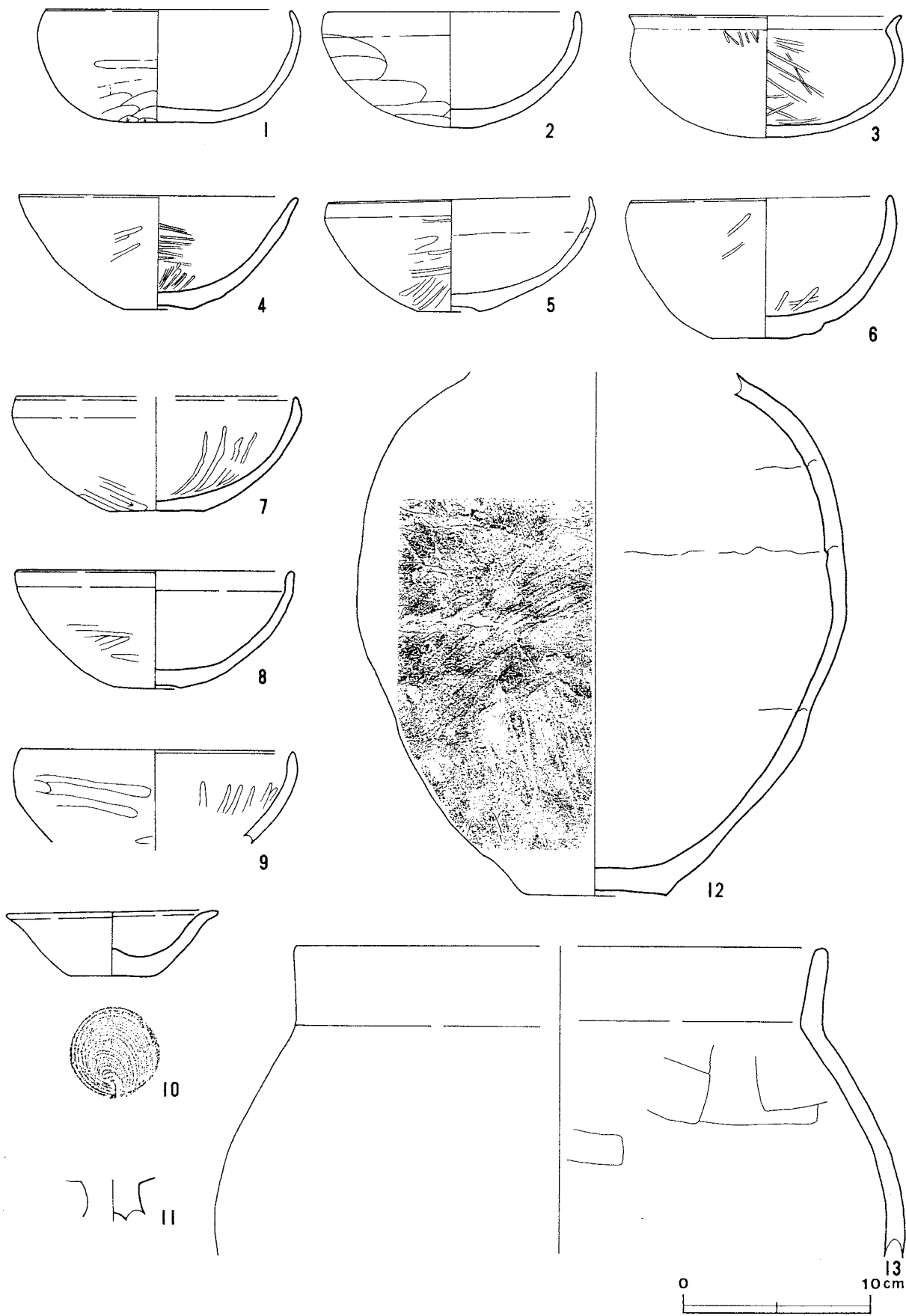
**貯蔵穴** 4カ所。第1号貯蔵穴は、南東コーナーに付設されており、上面を粘土が覆っていた。規模は長径76cm、短径65cmの円形で、深さは14cmである。底面は皿状で、壁はゆるやかに立ち上がっている。覆土は1層で、ローム中ブロックを中量、ローム粒子を少量、粘土ブロックを中量含む褐色土である。第2号貯蔵穴は、南壁の中央部に付設されている。規模は長径76cm、短径34cmの不定形で、深さは12cmである。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がっている。覆土は1層で、ローム粒子を少量含む褐色土である。第3号貯蔵穴は、南西コーナーに付設されている。規模は長径75cm、短径34cmの不定形で、深さは10cmである。底面は平坦で、ゆるやかに立ち上がっている。覆土は1層で、ローム粒子を少量含む褐色土である。第4号貯蔵穴は、北西コーナーに付設されている。規模は長径48cm、短径45cmの円形で、深さは17cmである。底面は鍋底状をしており、壁は外傾して立ち上がっている。覆土は2層からなり、1層はローム小ブロックを微量含む黒褐色土、2層はローム粒子を少量含む褐色土である。

**覆土** 3層からなる。1層はローム粒子を少量含む黒褐色土、2層はローム粒子を少量含む褐色土、3層はローム粒子を少量含む暗褐色土で、自然堆積と考えられる。遺物の多くは、2・3層から出土している。

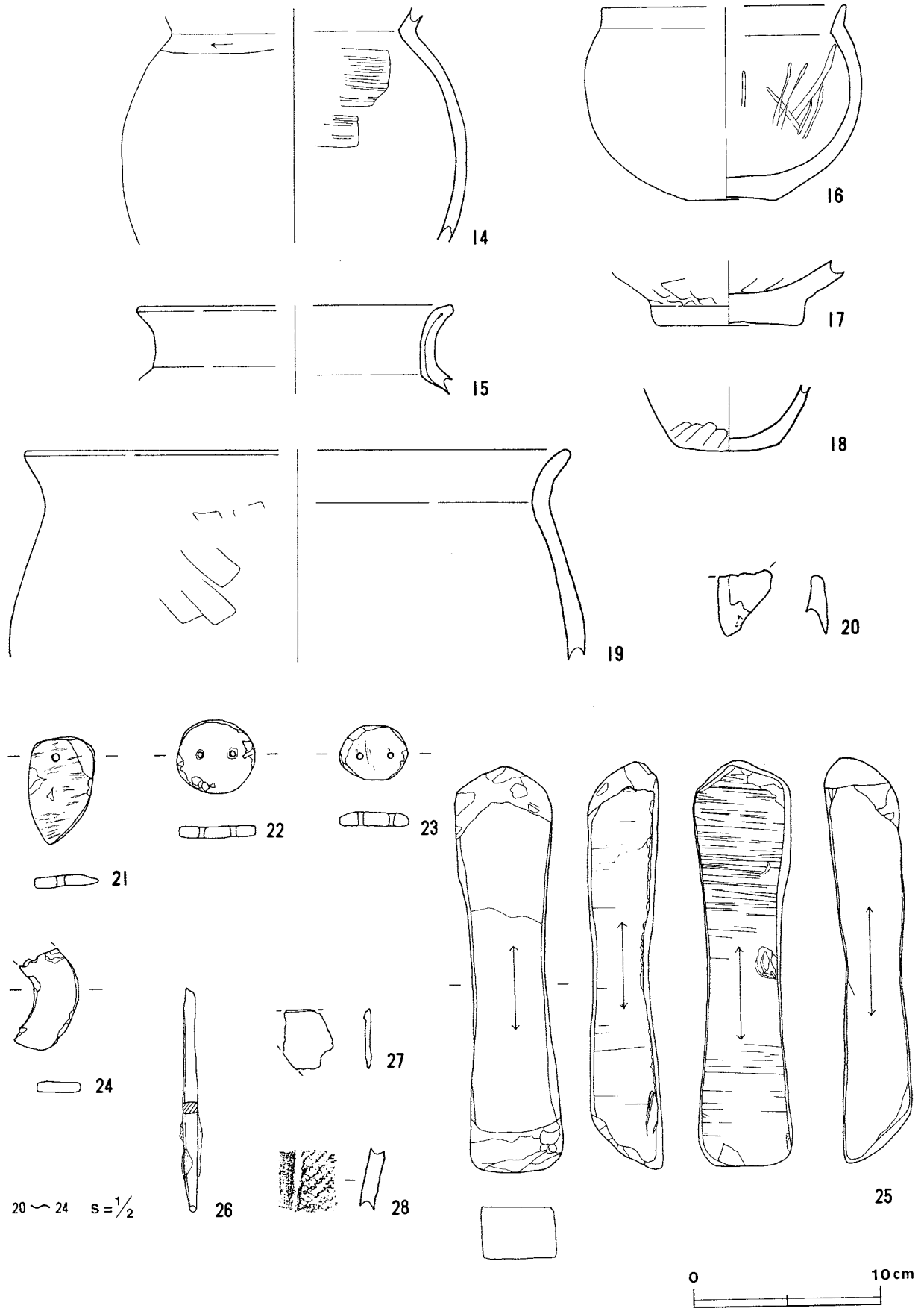
**遺物** 壁際、特にコーナー付近より多くの遺物が出土している。第1号貯蔵穴の確認面から第7図4・6の土師器壺は逆位の状態で、1の土師器坏は横位の状態で、それぞれ床面から出土している。12の土師器甕は南西



第6図 第1号住居跡実測・遺物出土位置図



第7图 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第 8 图 第 1 号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

コーナー付近の覆土下層からつぶれた状態で出土している。2の土師器坑は北西コーナーの覆土下層から斜位の状態で出土している。混入と思われる10の土師質土器坏は、南壁寄りの2層から逆位の状態で出土している。  
**所見** 本跡は出土遺物等から、古墳時代中期（和泉期）の住居跡と考えられる。

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7図 1	坏 土師器	A 13.1 B 6.0	丸底。体部から口縁部にかけて内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後、ヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英 スコリア にぶい橙色 普通	P1 100% 床面 内面剥離
2	坑 土師器	A 13.3 B 6.3	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ削り後、ヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石 スコリア にぶい橙色 普通	P2 95% 床面 内面剥離
3	坑 土師器	A 14.6 B 6.6	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、上位で屈曲する。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラ磨き。体部内面不整方向のヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P3 95% 覆土下層 体部外面煤付着
4	坑 土師器	A 14.9 B 6.0 C 3.2	上げ底。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、口縁部はやや外傾する。	体部外面ヘラ削り後、ヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石 にぶい橙色 普通	P4 90% 床面 体部二次焼成
5	坑 土師器	A 13.9 B 6.2 C 3.4	上げ底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部は内傾する。	体部内・外面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P5 90% 覆土下層
6	坑 土師器	A 14.0 B 7.8 C 5.3	平底。体部から口縁部にかけて内彎しながら立ち上がる。	体部内・外面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P6 80% 床面 内面剥離 体部外面煤付着
7	坑 土師器	A [15.0] B 6.1 C 5.0	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部は内傾する。	体部外面ヘラ磨き。体部内面不整方向ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 スコリア 明赤褐色 普通	P7 70% 覆土下層
8	坑 土師器	A [14.9] B 6.4 C [3.6]	上げ底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部の境に不明瞭な稜を有する。口縁部は直立する。	体部内・外面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P8 40% 床面
9	坑 土師器	A 14.6 B (5.0)	口縁部片。口縁部は内彎する。	体部内・外面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい橙色 普通	P9 20% 覆土下層
10	坏 土師質土器	A 11.4 B 3.1 C 4.1	平底。体部は直線的に外傾する。口縁部は外反する。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・長石 灰白色 普通	P10 95% 覆土中層
11	高坏 土師器	B (2.2)	脚部片。脚部は「ハ」の字状に開く。	脚部外面ヘラナデ。	バミス・スコリア 浅黄橙色 普通	P11 5% 覆土下層
12	甕 土師器	B (28.1) C 7.8	口縁部欠損。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内面ヘラナデ。体部外面ヘラ磨き。体部外面に輪積み痕が残る。	長石・スコリア にぶい橙色 普通	P13 40% 覆土下層 体部外面煤付着
13	甕 土師器	A [28.4] B (16.7)	口縁部片。口縁部は頸部からやや外傾する。	口縁部外面横ナデ。	砂粒・長石 スコリア にぶい橙色 普通	P12 20% 覆土下層 体部外面煤付着
第8図 14	甕 土師器	B (12.7)	体部片。体部は球形状をしている。	体部内・外面ヘラナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P14 20% 覆土下層
15	甕 土師器	A [17.0] B (4.9)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P15 5% 覆土下層
16	坑 土師器	A [13.0] B 10.5 C 5.0	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、上位で屈曲する。口縁部はやや外傾する。	体部外面ヘラ磨き。体部内面不整方向ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	P16 80% 覆土下層
17	甕 土師器	B (3.5) C 7.6	底部片。平底。	底部内面ヘラナデ。	砂粒・スコリア 灰黄褐色 普通	P17 10% 覆土
18	甕 土師器	B (3.6) C 5.4	底部片。平底。	底部内面ヘラ磨き。	砂粒 灰褐色 普通	P18 10% 覆土下層
19	甕 土師器	A [29.2] B (11.4)	口縁部片。口縁部は外傾する。	体部外面ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	スコリア・バミス 橙色 普通	P19 5% 覆土下層

図版番号	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
20	羽口	2.1	1.8	0.7	5	5	覆土	DPI 破片

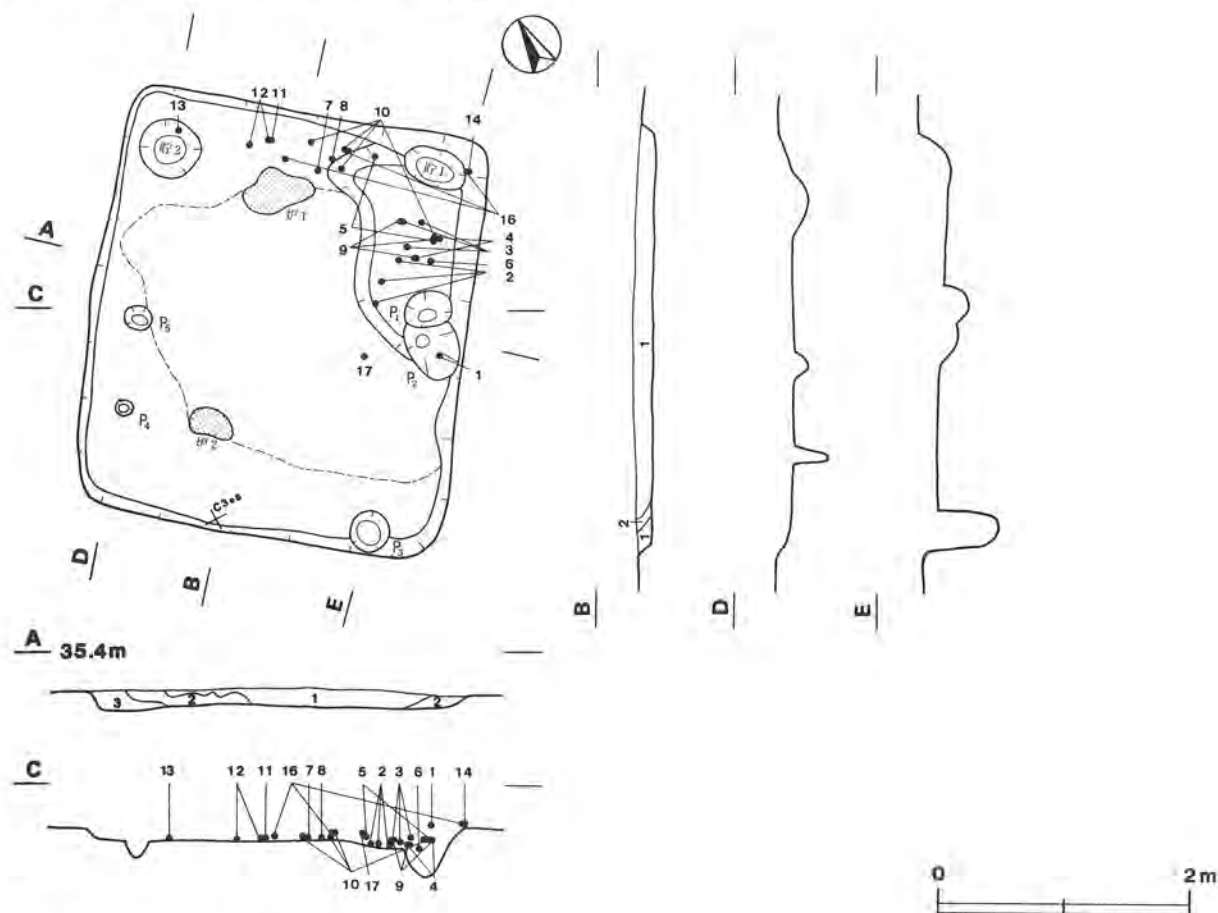
図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
21	剣形模造品	3.9	2.3	0.4	8.0	滑石	覆土下層	Q1
22	双孔円板	2.6	2.8	0.4	8.0	滑石	覆土下層	Q2
23	双孔円板	2.0	2.5	0.4	5.0	滑石	覆土下層	Q3
24	勾玉	(3.7)	1.5	0.4	5.0	滑石	覆土下層	Q4
25	砥石	20.8	5.3	3.8	460.0	凝灰岩	床面	Q5

図版番号	器種	計測値				備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
26	鉄鏃	(12.2)	0.9	0.6	(12.0)	M1 床面
27	鎌	(2.6)	(3.3)	(0.4)	(5.0)	M2 覆土

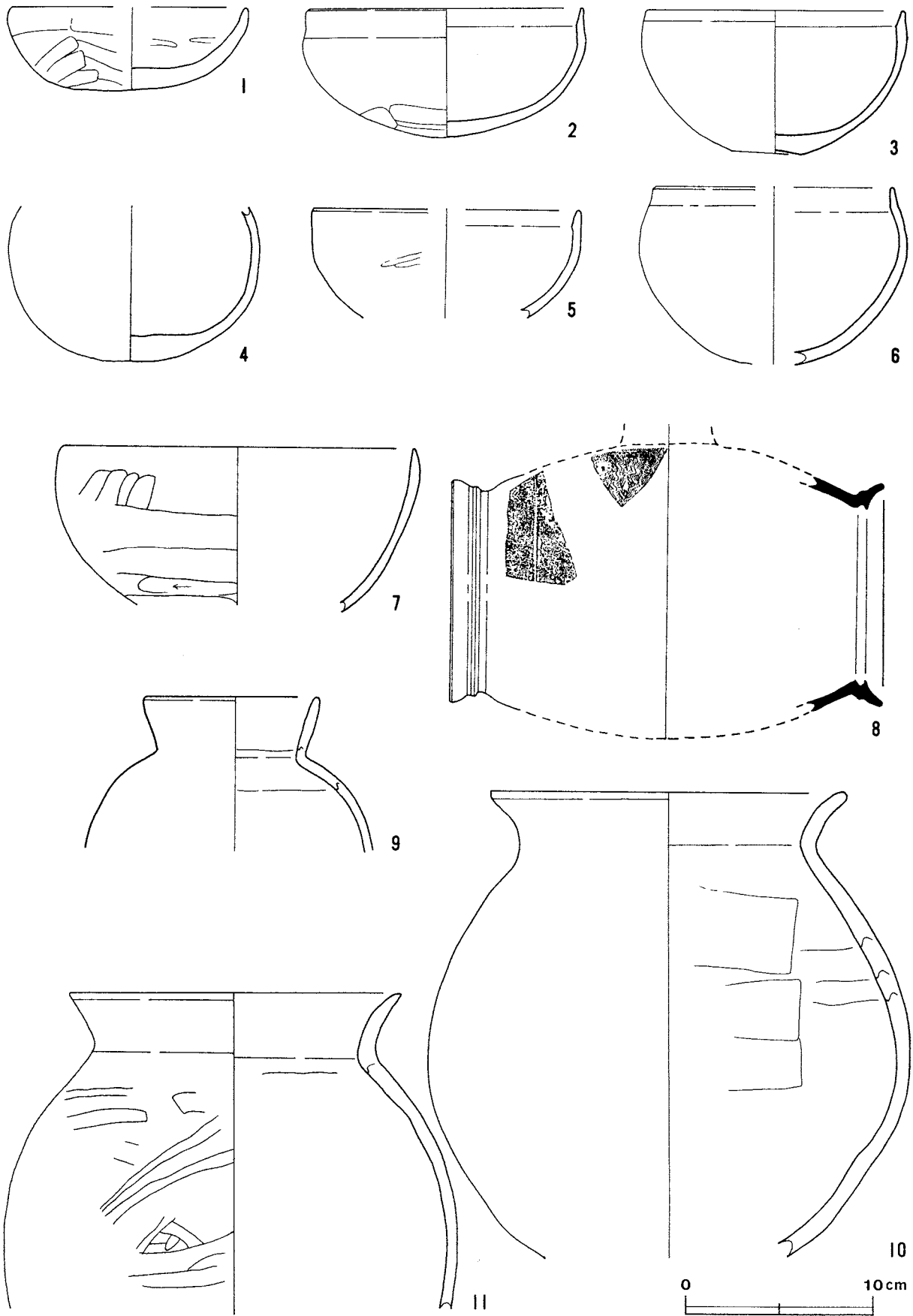
28は深鉢形土器胴部片で、縄文中期（加曾利E）に比定される。地文はLRの縄文であり、沈線で区画されている。

### 第2号住居跡（第9図）

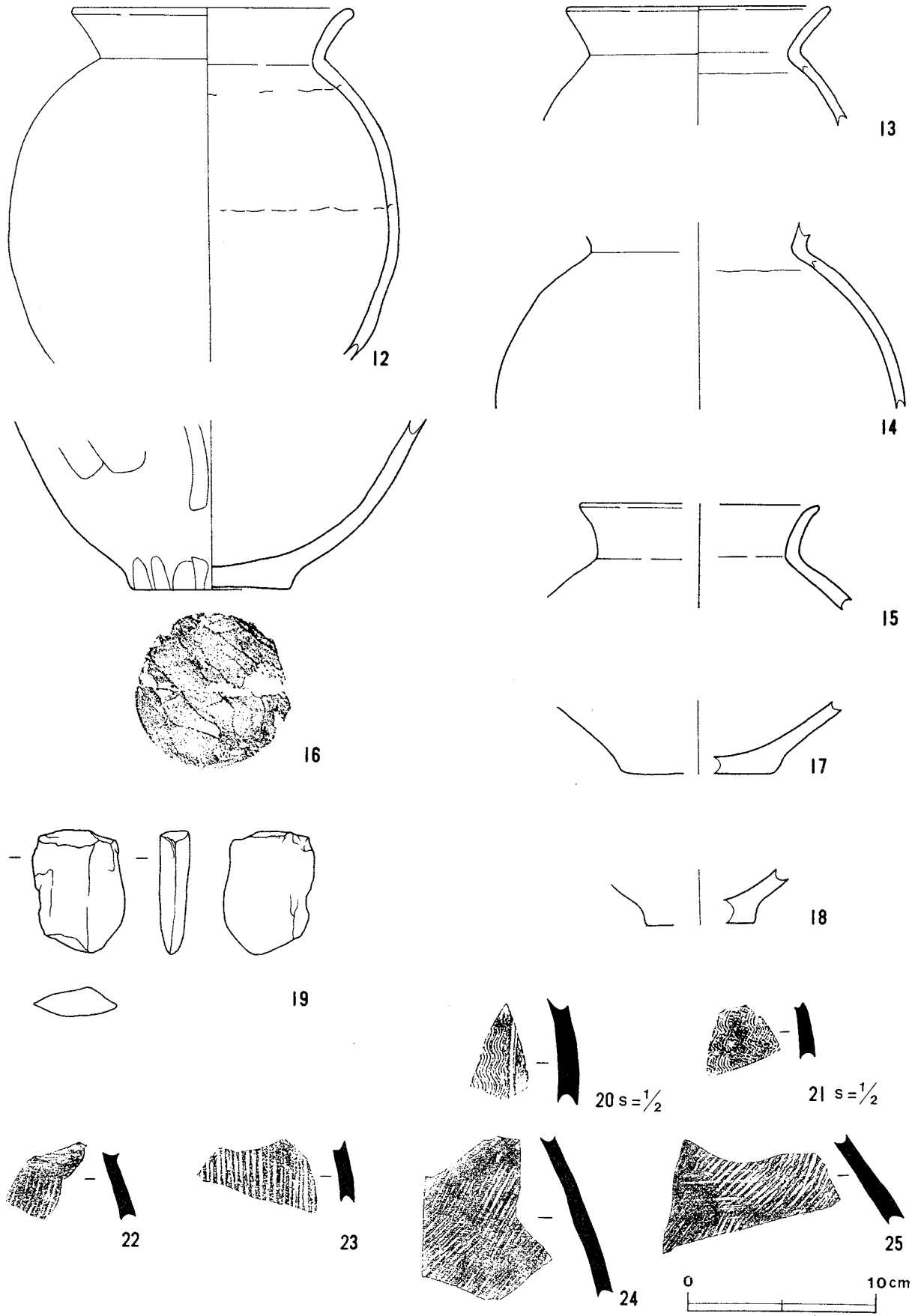
位置 調査区の中央部，C3e8区を中心に確認。



第9図 第2号住居跡実測・遺物出土位置図



第10图 第2号住居跡出土遺物実測図(1)



第11图 第2号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)



規模と平面形 長軸3.91m 短軸3.03mの長方形。

主軸方向 N-38°-E。

壁 壁高は10~15cmで緩斜して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部を中心に広く踏み固められている。第1号貯蔵穴からP<sub>2</sub>にかけて、やや低い部分が見られる。

ピット 5カ所。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は長径42~55cm、短径27~39cmの楕円形で、深さは15~48cmである。P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>は長径14~33cm、短径12~30cmの円形で、深さは10~48cmである。P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>の性格は不明である。

炉 2カ所。第1号炉は、主軸線上の北東壁寄りに付設されている。長径58cm、短径32cmの楕円形で床を3cmほど掘り窪めた地床炉である。第2号炉は西コーナー付近に付設されており長径35cm、短径22cmの楕円形で床を2cmほど掘り窪めた地床炉である。いずれも覆土は1層であり、焼土粒子を多量に含む暗褐色土である。

貯蔵穴 2カ所。第1号貯蔵穴は東コーナーに付設されており長径50cm、短径32cmの楕円形で、深さは6cmである。底面は皿状で、壁はゆるやかに立ち上がっている。第2号貯蔵穴は北コーナーに付設されており長径48cm、短径46cmの円形で、深さは13cmである。底面は皿状で、壁はゆるやかに立ち上がっている。いずれも覆土は1層で、ローム粒子を少量含む暗褐色土である。

覆土 3層からなるが、1層が大半を占める。1層はローム粒子を少量含む黒褐色土である。2層はローム小ブロックを微量、ローム粒子を少量含む褐色土である。3層はローム粒子を少量含む褐色土である。自然堆積と考えられる。本跡の上面は耕作によりほとんどが削り取られている。

遺物 多くの遺物は北東壁際の第1号炉周辺を中心に、床面から出土している。第10図8の須恵器樽形甕は、北東壁際の覆土下層から出土している。1の土師器坏は、南東壁中央部付近の床面からつぶれた状態で出土している。3の土師器碗は北東コーナー付近の床面から、逆位のつぶれた状態で出土している。10の土師器甕は、北東壁際の床面からつぶれた状態で出土している。

所見 本跡は出土遺物等から、古墳時代中期（和泉期）の住居跡と考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第10図 1	坏 土師器	A [12.5] B 4.5	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はやや内彎する。	体部外面ヘラ削り後、ヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P20 60% 床面
2	碗 土師器	A 14.8 B 6.9	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラ削り後、ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 スコリア にぶい橙色 普通	P21 85% 床面 体部外面煤付着
3	碗 土師器	A 13.6 B 8.0 C 3.7	上げ底。体部は内彎しながら立ち上がり、上位でやや屈曲する。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラ磨き。体部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P22 90% 床面 体部外面煤付着
4	碗 土師器	B (8.4)	底部から体部にかけての破片。丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラ削り後、ヘラ磨き。体部内面ヘラ磨き。	砂粒・雲母 スコリア にぶい橙色 普通	P23 30% 床面 内面剝離
5	碗 土師器	A [14.4] B (5.9)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がり、上位でやや屈曲する。口縁部はほぼ直立する。	体部外面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	長石・スコリア バミス にぶい橙色 普通	P24 25% 床面
6	碗 土師器	A [12.7] B (9.6)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎しながら立ち上がり、上位でやや屈曲する。口縁部はほぼ直立する。	体部内・外面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P25 30% 床面 体部内面煤付着

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
7	鉢 土師器	A 18.8 B (9.4)	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部はやや内傾する。	体部内・外面へラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。体部に輪積み痕。	砂粒 に お い 橙 色 普 通	P26 80% 床面
8	樽形 須恵器	体部高 B (15.7)	体部片。体部端部は強い稜を持ち体部中央へ内彎する。	体部内面縦方向のナデ。体部外面縦方向の5本櫛歯の波状文。	砂粒 灰 色 普 通	P27 5% 覆土
9	壺 土師器	A 9.4 B (8.2)	体部下半欠損。体部は内彎して頸部に至る。口縁部は外傾して立ち上がる。	体部外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 明赤褐色 普 通	P28 20% 床面
10	甕 土師器	A 18.9 B (24.8)	体部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、最大径を中位にもつ。口縁部は頸部から「く」の字状に外反する。	体部外面ナデ。体部内面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・パミス・スコリア 橙 色 普 通	P29 80% 床面
11	甕 土師器	A 17.7 B (16.9)	体部下半欠損。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は頸部から「く」の字状に外反する。	体部外面ナデ。体部内面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 雲母 に お い 橙 色 普 通	P30 30% 床面 内面輪積み痕
12	甕 土師器	A 14.9 B (19.2)	底部欠損。体部は内彎しながら立ち上がり、最大径を中位にもつ。口縁部は頸部から「く」の字状に外反する。	体部外面ナデ。体部内面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	長石・スコリア に お い 橙 色 普 通	P31 50% 床面 内面輪積み痕
13	甕 土師器	A 14.1 B (6.3)	口縁部片。口縁部は頸部から外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 スコリア に お い 橙 色 普 通	P32 30% 床面
14	甕 土師器	B (10.0)	体部片。体部は内彎しながら立ち上がり、頸部に至る。	体部外面ナデ。体部内面へラナデ。	砂粒・スコリア 長石 に お い 赤 褐 色 普 通	P33 20% 床面 体部外面煤付着
15	甕 土師器	A [12.8] B (5.1)	口縁部片。口縁部は頸部から「く」の字状に外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 雲母・長石 に お い 橙 色 普 通	P34 10% 覆土下層
16	甕 土師器	B (9.1) C 8.4	底部から体部にかけての破片。平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部内面へラナデ。	砂粒・石英・スコリア に お い 赤 褐 色 普 通	P35 20% 覆土下層
17	甕 土師器	B (3.9) C [8.4]	底部片。平底。	底部内面へラナデ。	砂粒・雲母 褐灰色 普 通	P36 5% 覆土下層
18	甕 土師器	B (2.8) C [5.8]	底部片。平底。	底部内面へラナデ。	砂粒・長石・石英 に お い 褐 色 普 通	P37 5% 覆土下層

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
19	剥片	(6.0)	(4.9)	(1.5)	(81.0)	砂岩	覆土下層	Q7

20・21は須恵器である。縦方向の波状文が施されている。22～25は須恵器甕の体部片である。外面に平行叩き目が施されている。

### 第3号住居跡 (第12図)

位置 調査区の北側中央部, C4a4区を中心に確認。

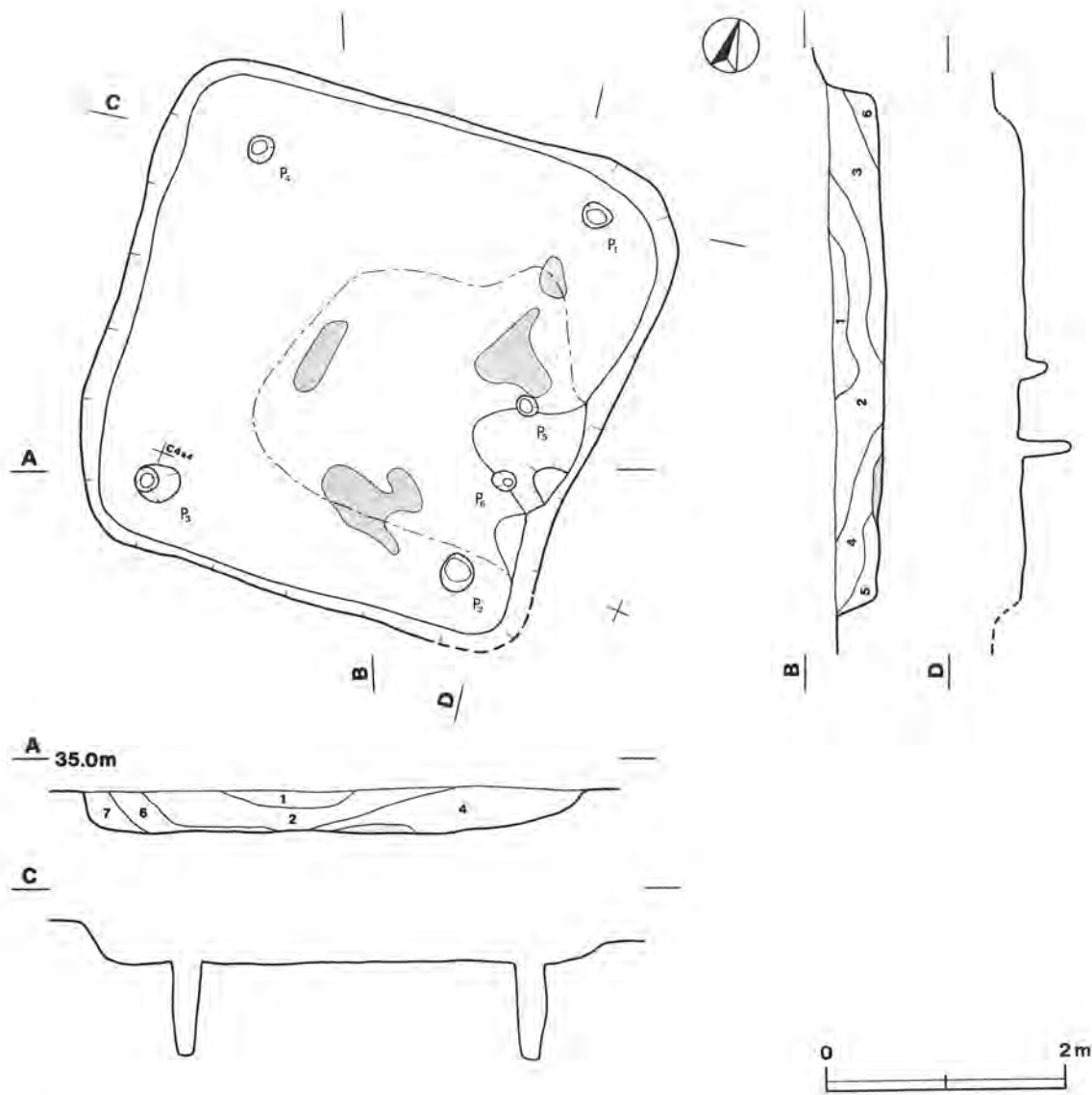
規模と平面形 長軸4.30m 短軸4.05mの方形。

長軸方向 N-0°。

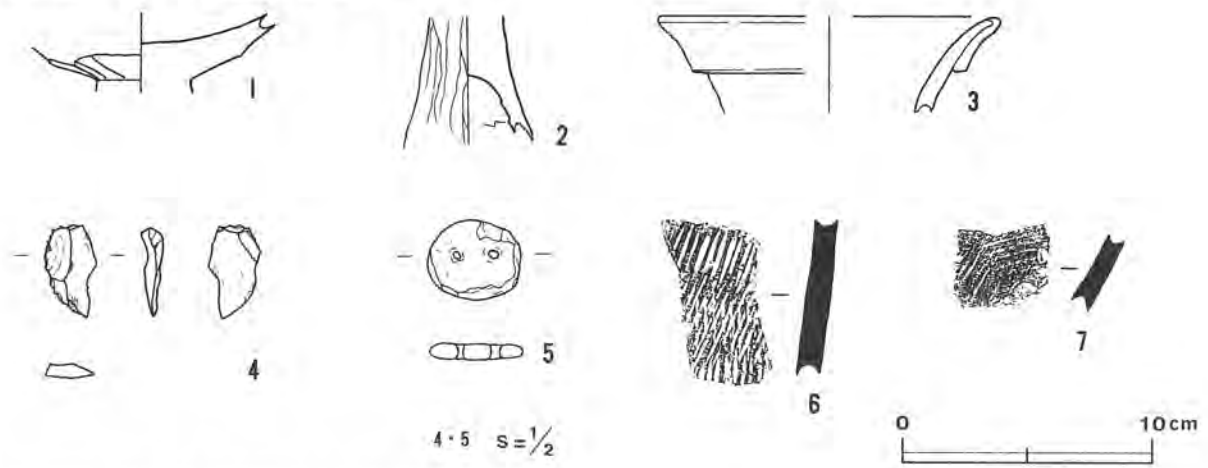
壁 壁高は23～35cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。出入口部と考えられる梯子ピット (P<sub>5</sub>, P<sub>6</sub>) が東壁寄りで確認されており、このピットを囲むように馬蹄形の高まりがある。また出入口部から中央部に向かって踏み固められている。

ピット 6カ所。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は長径23～38cm, 短径20～32cmの円形で、深さは72～80cmである。規模や配列から支柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>は長径18cm～22cm, 短径16～18cmの円形で、深さは24～44cmである。東壁際のほぼ中央に並んで位置しており、出入口施設に伴うピットと考えられる。



第12図 第3号住居跡実測図



第13図 第3号住居跡出土遺物実測・拓影図

**覆土** 7層からなる。1・2層はローム小ブロックを少量、ローム粒子を少量含む黒褐色土である。3・4層はローム小ブロック、ローム粒子を微量含む極暗褐色土または黒褐色土である。5・6層はローム粒子を少量含む極暗褐色土または暗褐色土である。7層は黒色粒子を少量含む褐色土である。自然堆積と考えられる。

**遺物** 第13図1の高坏(坏部)、2の高坏(脚部)は東壁際の覆土下層から出土している。また床面4カ所からは青白色の粘土の塊が確認された。

**所見** 本跡は出土遺物等から、古墳時代中期(和泉期)の住居跡と考えられる。

### 第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第13図1	高坏土師器	A(9.7) B(3.1) E(2.0)	坏部片。坏部は下位に稜を持ち、外傾する。	坏部内・外面へラ磨き。	砂粒・長石・石英スコリア にぶい橙色 普通	P38 20% 覆土下層
2	高坏土師器	B(5.2)	脚部片。脚部は「ハ」の字状にひろく。	脚部外面へラ磨き。	長石・スコリア 橙色 普通	P39 5% 覆土下層
3	壺土師器	A[13.8] B(3.8)	口縁部片。複合口縁。口縁部は稜を持ち外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・スコリア 浅黄橙色 普通	P40 5% 覆土下層

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
4	剥片	1.4	2.4	0.6	5.0	頁岩	覆土下層	Q8
5	双孔円板	2.1	2.5	0.4	8.0	滑石	覆土下層	Q9

6・7は須恵器甕の体部片である。平行叩き目が施されている。

### 第4号住居跡(第14図)

**位置** 調査区の南側中央部、C4g6区を中心に確認。本跡の南側は調査区外にのびている。

**重複関係** 本跡は、東側を第7号地下式塙(SK31)に掘り込まれている。

**規模** 長軸(2.10)m、短軸(1.20)m

**壁** 壁高は45cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

**床** 平坦で全体的に硬質である。

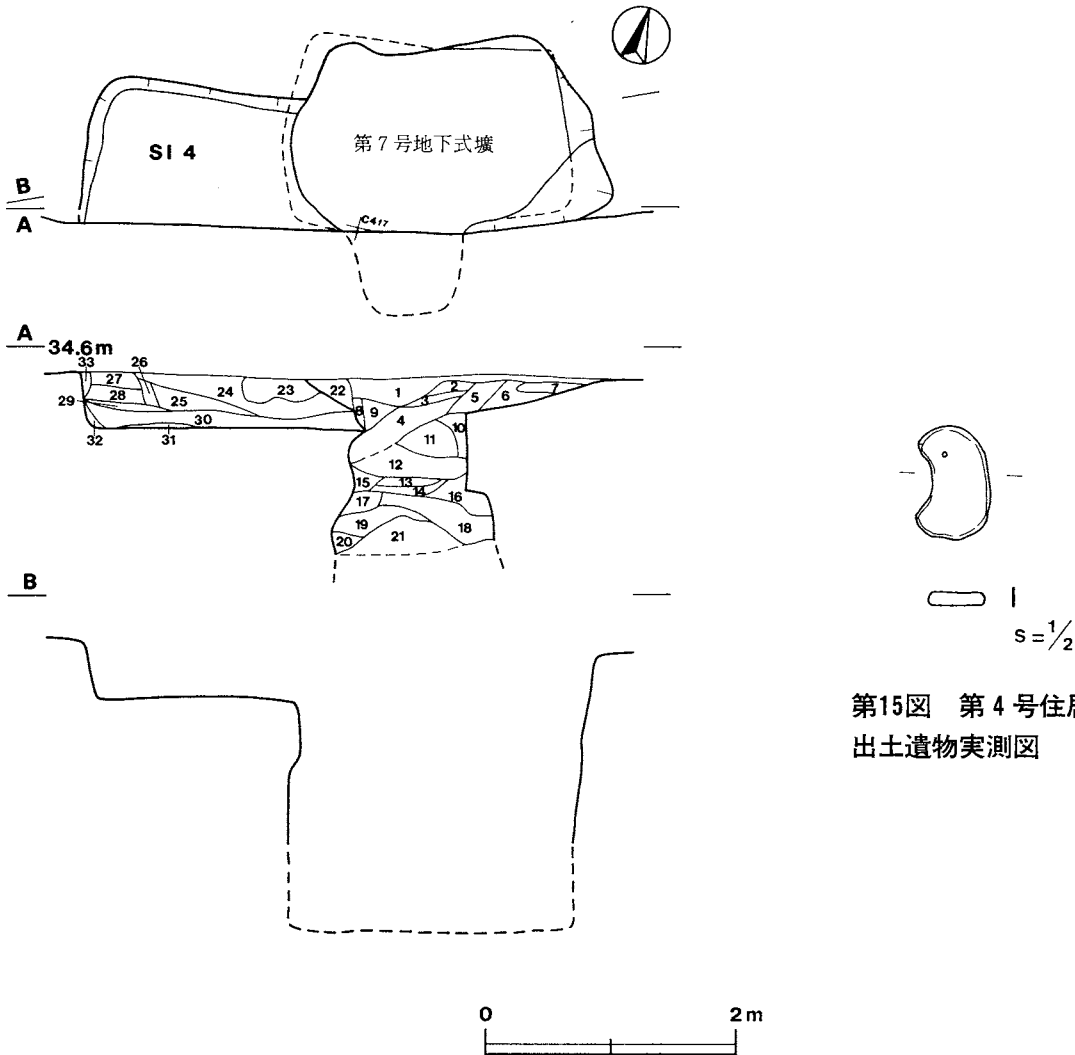
**覆土** 11層からなる。23~28層はローム小ブロックを微量、ローム粒子を少量含む黒褐色土である。29・30層はローム小ブロックを微量、ローム粒子を少量含む暗黒褐色土である。31・32層はローム粒子を微量含む黒色土または黒褐色土である。33層はローム粒子を微量含む極暗褐色土である。自然堆積と考えられる。

**遺物** 北西コーナーの覆土下層から第15図1の石製模造品が出土している。

**所見** 住居跡の北西コーナーを調査しただけであり、主軸方向・規模・平面形は不明である。調査した部分から、ピット・炉・貯蔵穴は確認できなかった。本跡は出土遺物から、古墳時代中期の住居跡と考えられる。

### 第4号住居跡出土石製品一覧表

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第15図1	勾玉	3.0	2.0	0.3	8.0	滑石	覆土下層	Q10



第15図 第4号住居跡  
出土遺物実測図

第14図 第4号住居跡，第7号地下式壙実測図

表2 住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設					炉	覆土	出土遺物	備考
							壁溝	主柱穴	貯蔵穴	ピット	入口				
1	C3i3	N-19°-W	長方形	6.18×4.50	50~63	平坦	/	5	4	4	1	2	自然	土師器，鉄鏝，砥石，石製双孔円板・勾玉	
2	C3e8	N-38°-E	長方形	3.91×3.03	10~15	平坦	/		2	5		2	自然	土師器，須恵器	
3	C4a4	N-0°	方形	4.30×4.05	25~35	平坦	/	4			2		自然	土師器，粘土	
4	C4g6			(2.10)×(1.20)	45	平坦	/						自然	石製双孔円板	

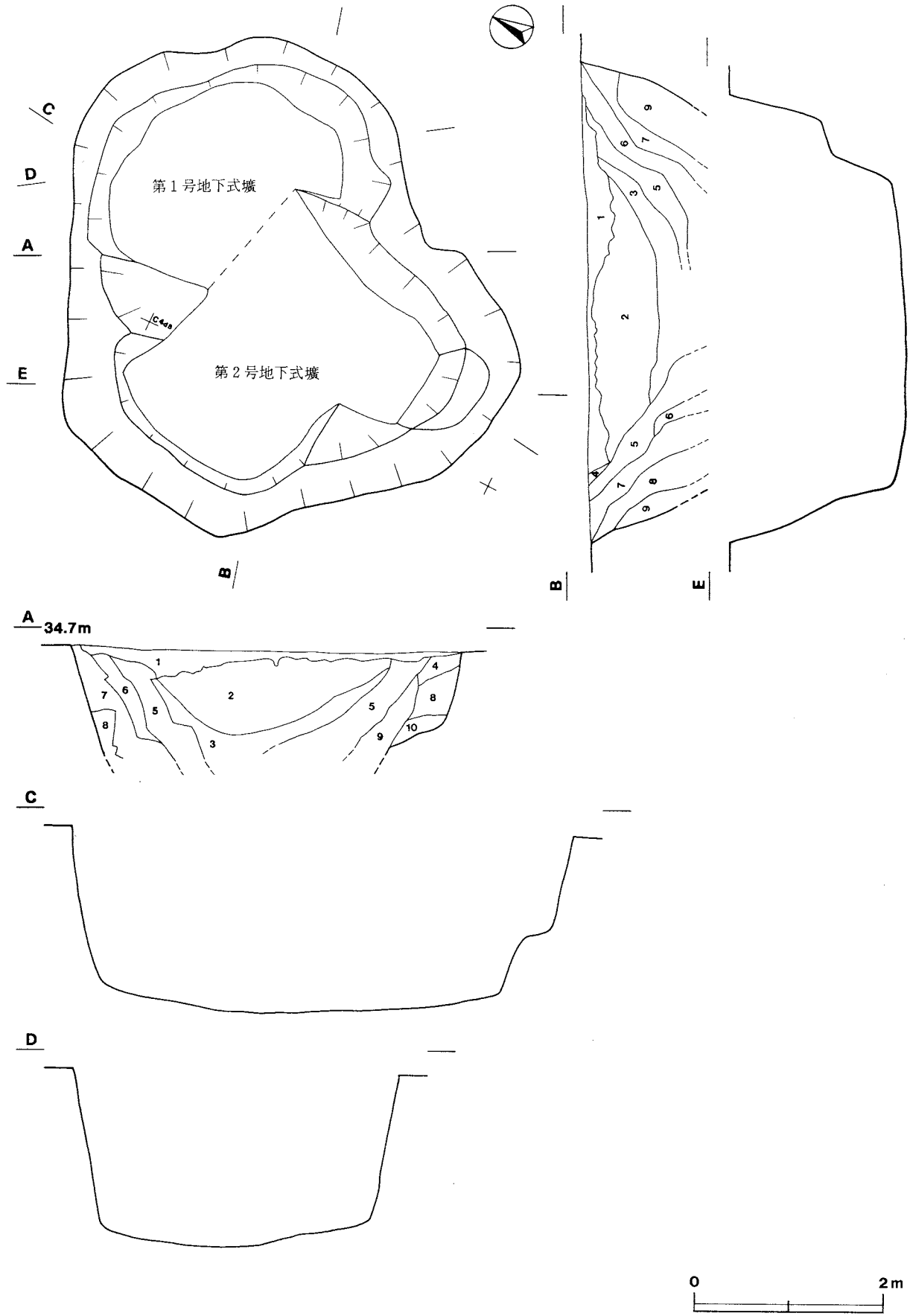
## 2 地下式壙

当遺跡からは，9基の地下式壙が確認された。調査区の東側に集中しており，他の遺構との重複もみられた。出土遺物が少なく，性格については不明な点が多いが，時期は15世紀後半から16世紀前半にかけての遺構である。以下，確認された地下式壙の特徴や主な出土遺物について記載する。

### 第1号地下式壙 [SK-11] (第16図)

位置 調査区の東側，C4d8区を中心に確認。

重複関係 本跡の南西側は，第2号地下式壙と重複している。新旧関係については不明である。



第16图 第1・2号地下式壙実测图

主軸方向 不明。

竪坑 第2号地下式壙と重複しているため不明である。

主室 底面は長軸2.65m、短軸1.80mの隅丸方形をしており、平坦である。確認面から主室底面までの深さは1.95mで、長軸方向はN-42°-Wである。

壁 外傾して立ち上がっている。

覆土 10層からなる。1層はローム粒子を少量含む黒褐色土である。2・3層は粘土中・小ブロックを少量含むにぶい橙色土または褐色土で粘性、しまりとも強い。4層はローム粒子を少量含む灰褐色土である。5～8層は粘土小ブロック、ローム粒子を少量含む黒褐色土である。9層は黒色小ブロックを微量、黒色粒子を少量含む褐色土である。10層は黒色小ブロック、黒色粒子を含む浅黄橙色土である。底面付近にローム層の堆積が見られ、天井部崩落の自然堆積と考えられる。

遺物 覆土上層から内耳鍋の口縁部片、混入と思われる土師器甕の体部片が出土している。

所見 本跡は出土遺物から、15世紀後半から16世紀前半のものと考えられる。

### 第2号地下式壙 [SK-12] (第16図)

位置 調査区の東側、C4d8区を中心に確認。

重複関係 本跡の主室の北東側は第1号地下式壙と重複している。新旧関係は不明である。

主軸方向 N-12°-E。

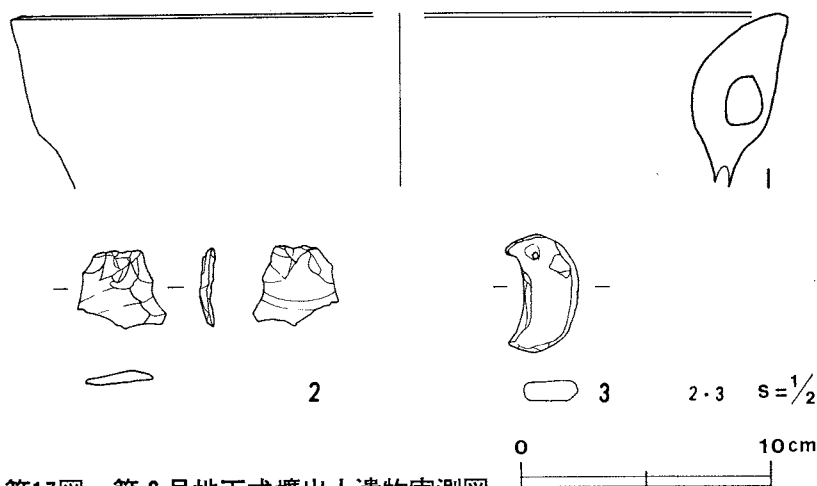
竪坑 上面は長径3.20m、短径1.50mの半楕円形で、深さは1.75mである。底面は長軸1.15m、短軸0.60mの長方形で、長軸方向はN-74°-Wである。

主室 底面は長軸2.75m、短軸1.80mの長方形をしており、平坦である。確認面から主室底面までの深さは1.90mで、長軸方向はN-75°-Wである。

壁 竪坑は底面から0.25mの地点に平場を持って、外傾して立ち上がっている。主室は外傾して立ち上がっている。

覆土 10層からなる。1層はローム粒子を少量含む黒褐色土である。2・3層は粘土中・小ブロックを少量含むにぶい橙色土または褐色土で粘性、しまりとも強い。4層はローム粒子を少量含む灰褐色土である。5～8層は粘土小ブロック、ローム粒子を少量含む黒褐色土である。9層は黒色小ブロックを微量、黒色粒子を少量含む褐色土である。10層は黒色小ブロック、黒色粒子を少量含む浅黄橙色土である。底面付近に、ローム層の

堆積が見られ、天井部崩落の自然堆積と考えられる。



第17図 第2号地下式壙出土遺物実測図

**遺物** 覆土上層から第17図1の内耳鍋の口縁部片、石製模造品、土師器甕の胴部片が出土している。

**所見** 本跡は出土遺物から、15世紀後半から16世紀前半のものと考えられる。

## 第2号地下式墳出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図 1	内耳鍋 土師質土器	A [31.0] B (7.0)	口縁部片。口縁部は外傾気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・雲母 黒褐色 普通	P42 10% 覆土 体部外面煤附着

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
2	剝片	2.1	2.4	0.4	3.0	頁岩	覆土	Q11
3	勾玉	3.2	1.5	0.6	8.0	滑石	覆土	Q12

## 第3号地下式墳 [SK-27] (第18図)

**位置** 調査区の東側，C4c0区を中心に確認。本跡の東側は調査区外に伸びている。

**主軸方向** 不明。

**主室** 本跡の西側を調査しただけで、底面までは確認できなかった。長軸 (2.50) m，短軸 (1.25) m で深さは (1.10) m である。長軸方向はN-10°-Wである。

**壁** 主室はオーバーハングがみられる。

**覆土** 6層からなる。1層はローム大・小ブロック，ローム粒子を少量含む暗褐色土である。2～4層はローム中・小ブロック，黒色小ブロックを少量含む暗褐色土または褐色土である。5層はロームブロックを多量，鹿沼パミスを少量含むにぶい橙色土である。6層はロームの大・中・小ブロックを少量含む黒褐色土である。ロームブロックが含まれた覆土が斜めになっており，天井部分が崩落した自然堆積と考えられる。

**遺物** 混入と思われる土師器甕の体部片が，覆土上層から出土している。

**所見** 本跡は出土遺物が少ないので，時期は不明である。

## 第4号地下式墳 [SK-28] (第18図)

**位置** 調査区の東側，C4e8区を中心に確認。

**主軸** 方向N-37°-W。

**竪坑** 上面は長径0.70 m，短径0.64 mの円形をしており，深さは1.40 mである。底面は平坦で，長径0.77 m，短径0.70 mの円形である。長径方向はN-37°-Wである。主室底面との比高は8 cmである。

**主室** 底面は平坦で，長軸2.50 m，短軸1.80 mの長方形をしている。確認面から主室底面までの深さは1.48 mで，長軸方向はN-55°-Eである。

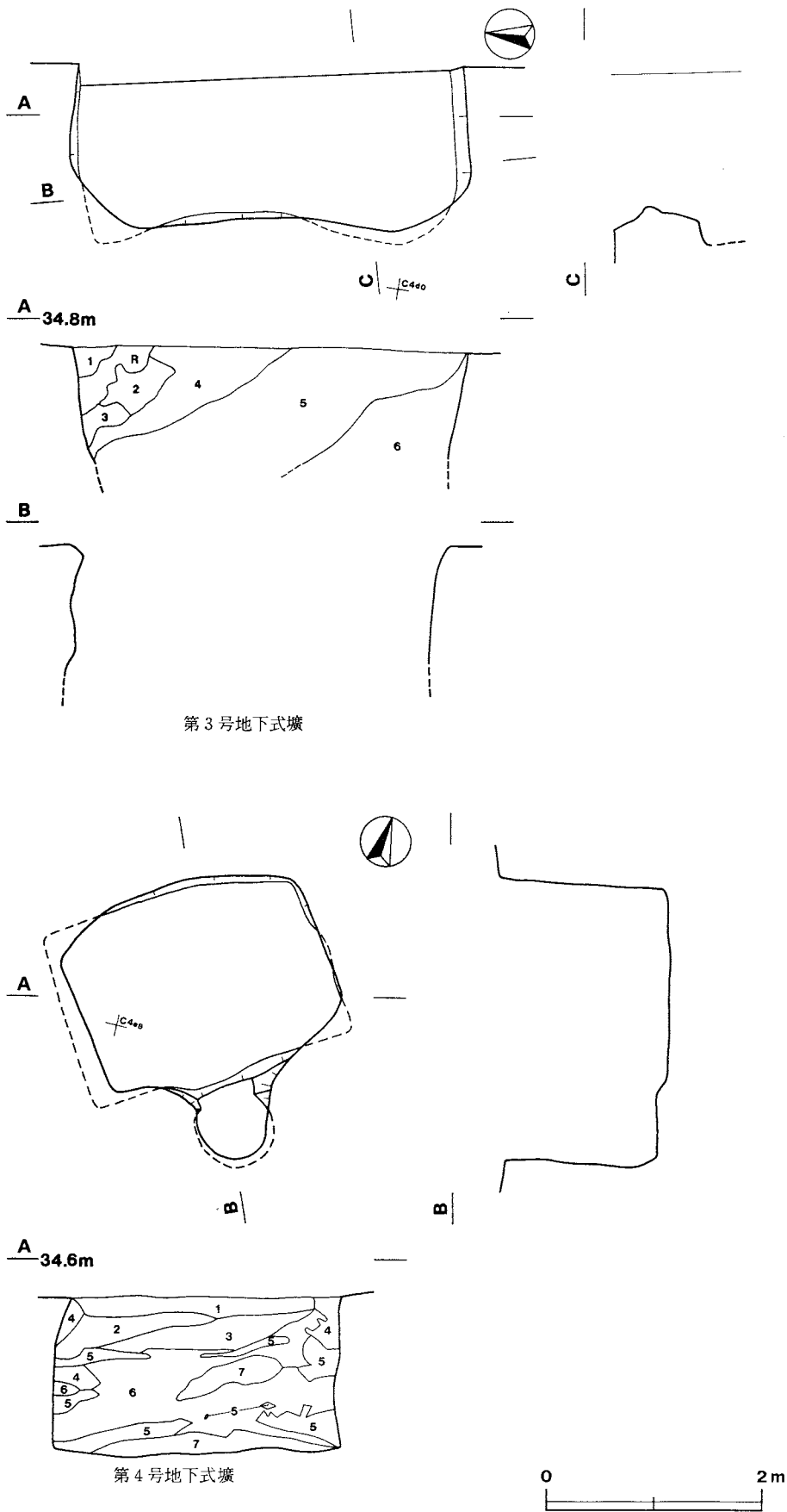
**壁** 竪坑，主室ともほぼ垂直に立ち上がっている。主室のコーナー部分でオーバーハングがみられる。

**覆土** 7層からなる。1・2層はローム小ブロック，ローム粒子を微量含む黒褐色土である。3層は粘土大ブロックを多量，黒色粒子を中量含む灰白色土で粘性，しまりとも強い。4・5層はローム粒子を少量含む褐色土または暗褐色土である。6層はローム小ブロックを少量含む黒褐色土である。7層はロームの中・小ブロック，ローム粒子を中量含む極暗褐色土である。覆土がブロック状になっており，人為堆積と考えられる。

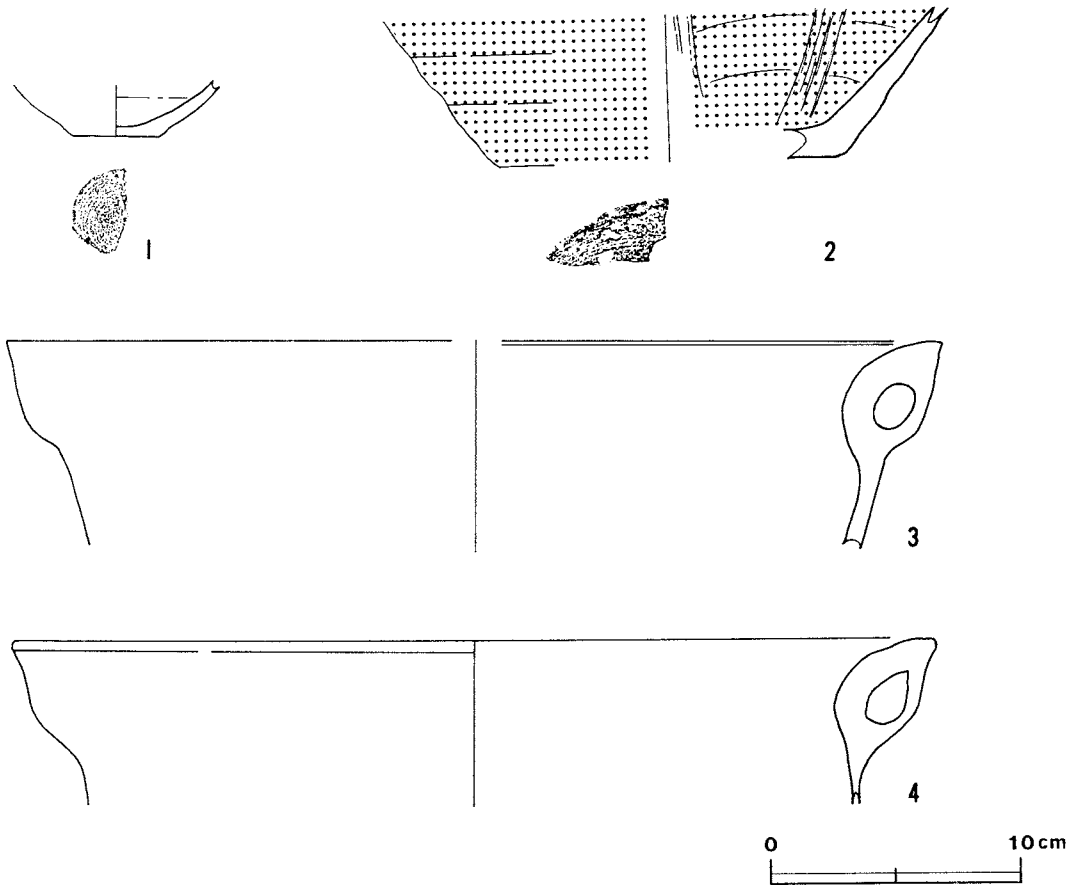
**遺物** 覆土上層から，第19図3の内耳鍋口縁部片や2の播鉢底部片が出土している。



所見 本跡は出土遺物から、15世紀後半から16世紀前半のものと考えられる。



第18図 第3・4号地下式墳実測図



第19図 第4号地下式墳出土遺物実測図

第4号地下式墳出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第19図 1	皿 土師質土器	B ( 2.1) C [ 3.6]	底部片。平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P43 20% 覆土
2	擂鉢 陶器	B ( 6.0) C [13.6]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は、不明瞭な稜を持ち直線的に立ち上がる。	内面に規則正しい播目が付けられている。	砂粒・石英 (釉) にぶい赤褐色 普通	P46 10% 覆土 常滑産
3	内耳鍋 土師質土器	A [37.2] B ( 8.4)	口縁部片。口縁部は外傾気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 スコリア にぶい赤褐色 普通	P44 5% 覆土 体部外面煤付着
4	内耳鍋 土師質土器	A [37.0] B ( 6.7)	口縁部片。口縁部は外傾気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 スコリア 赤色 普通	P45 5% 覆土 体部外面煤付着

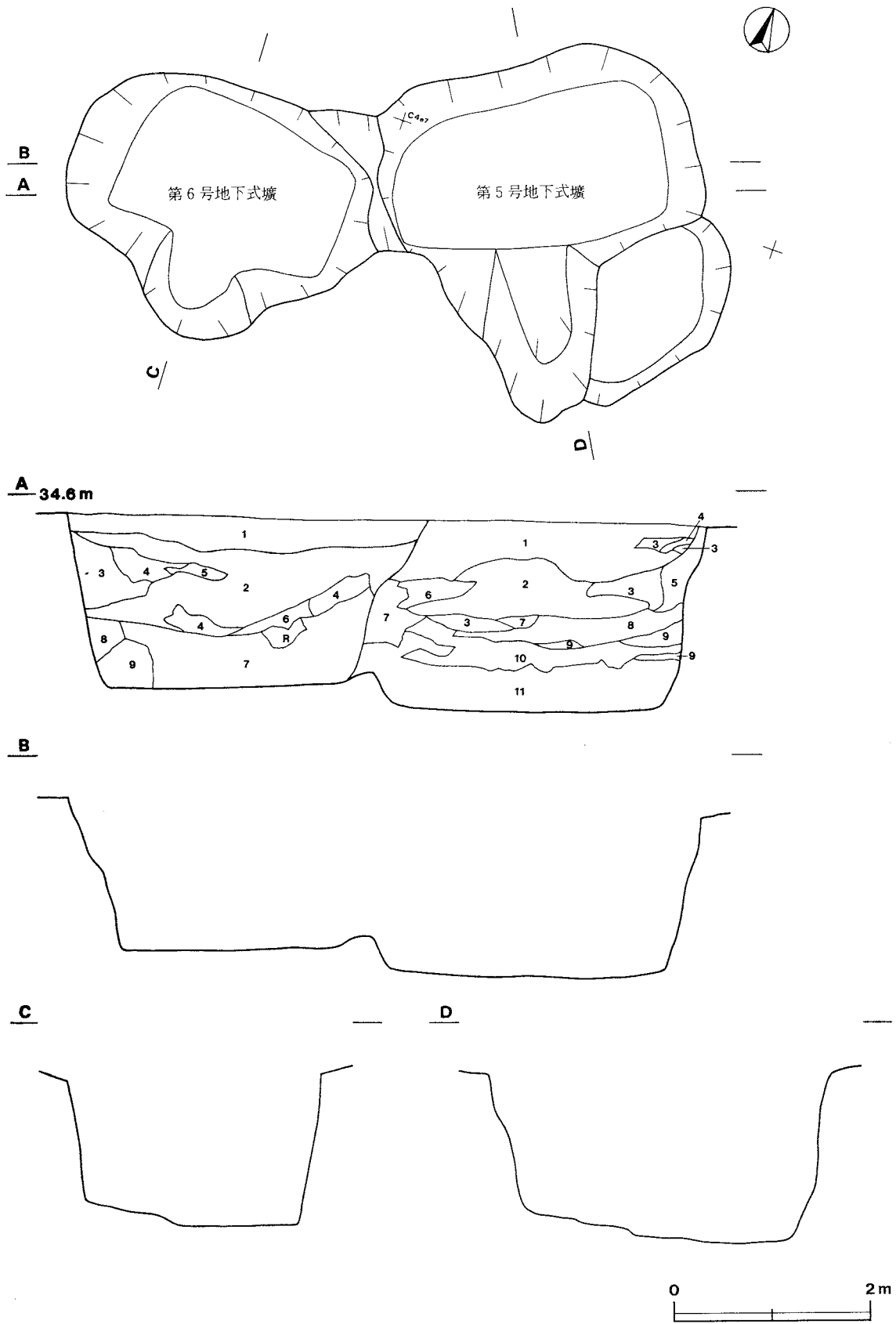
第5号地下式墳 [SK-29] (第20図)

位置 調査区の東側，C4f7区を中心に確認。

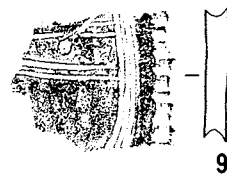
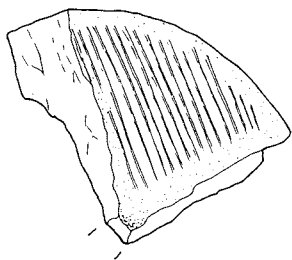
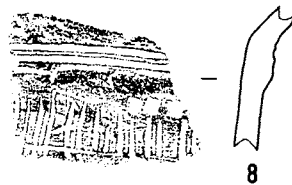
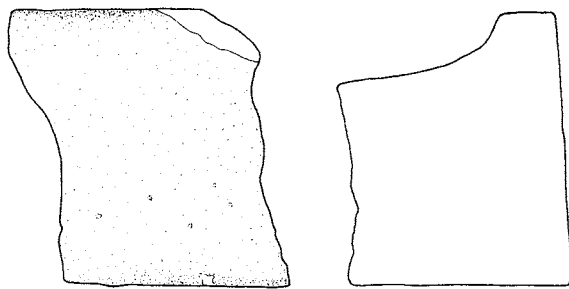
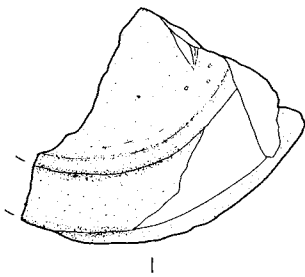
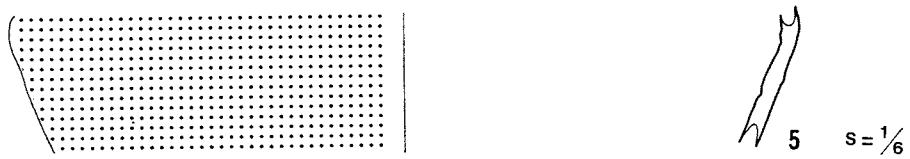
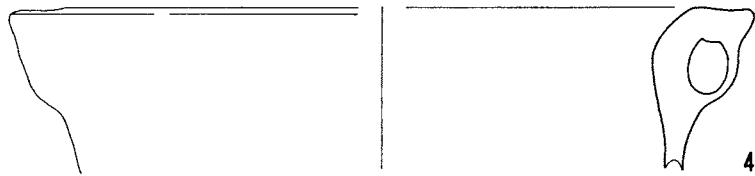
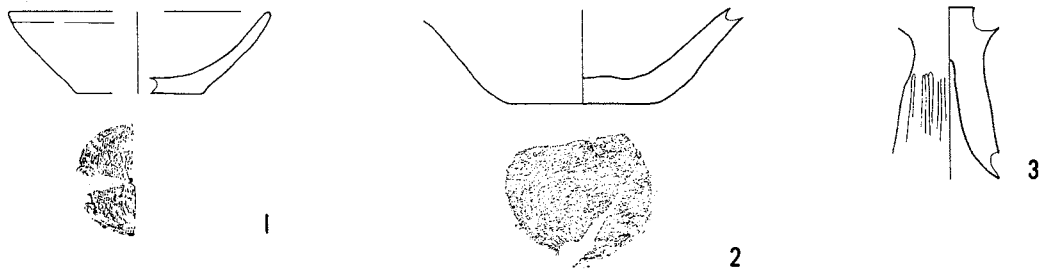
重複関係 主室の西側を第6号地下式墳により掘り込まれている。

主軸方向 N-31°-W。

竪坑 上面は長軸1.70m，短軸1.15mの隅丸台形をしている。底面は長径1.15m，短径0.52mの半楕円形をしており，深さは1.45mである。主室に向かってゆるやかに傾斜している。長軸方向はN-31°-Wである。竪坑の東側には長軸1.50m，短軸1.25mの長方形で，深さ0.42mの落ち込みがある。



第20图 第5・6号地下式壙实测图



6



第21图 第5号地下式壙出土遺物実測・拓影図

**主室** 底面は平坦で、長軸2.83m、短軸1.42mの隅丸長方形をしている。深さは1.68mで長軸方向はN-62°-Eである。

**壁** 竪坑、主室とも外傾して立ち上がっている。

**覆土** 11層からなる。1～3層はローム小ブロックを微量、ローム粒子を少量含む黒褐色土である。4・5層はローム粒子を多量に含む褐色土である。6層はロームの大・中・小ブロック、ローム粒子を少量含むにぶい褐色土である。7・8層はローム中ブロック、ローム粒子を少量含む黒色土または暗褐色土である。9層はローム小ブロックを微量含む、にぶい褐色土である。第10・11層はロームの中・小ブロック、粘土ブロックを少量含む黒褐色土または暗褐色土である。覆土中にロームブロックが含まれるなど、人為堆積と考えられる。

**遺物** 覆土上層から第21図1の土師質皿、5の陶器甕体部片が出土している。

**所見** 本跡は出土遺物から、15世紀後半から16世紀前半のものと考えられる。

### 第5号地下式墳出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第21図 1	皿 土師質土器	A [10.5] B 3.3	平底。体部から口縁部にかけて内彎気味に立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア 浅黄橙色 普通	P47 45% 覆土
2	皿 土師質土器	B (3.8) C [6.0]	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外傾気味に立ち上がる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア にぶい黄橙色 普通	P48 30% 覆土
3	高坏 土師器	B (6.0) E (5.3)	脚部片。脚部は「ハ」の字状にひらく。	脚部外面ヘラナデ。	砂粒・雲母 スコリア にぶい橙色 普通	P52 20% 覆土
4	内耳鍋 土師質土器	A [29.8] B (6.5)	口縁部片。口縁部は外傾気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	雲母 黒褐色土 普通	P50 5% 覆土 体部外面煤付着
5	甕 陶器	B (11.6)	体部片。	内面横ナデ。釉はかなり剥がれている。	灰褐色 (釉) オリーブ色 良好	P51 5% 覆土 常滑産

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
6	石白	11.0	(19.4)	(8.8)	(920.0)	安山岩	覆土	Q13 上白

7～9は縄文中期（阿玉台式）の深鉢形土器の口縁部片である。2条の細い沈線と隆帯が巡り、口縁部と胴部を区画している。隆帯の下に条線が施されている。

### 第6号地下式墳 [SK-30] (第20図)

**位置** 調査区の東側C4f<sub>6</sub>区を中心に確認。

**重複関係** 本跡は主室の東側が、第5号地下式墳を掘り込んでいる。

**主軸方向** N-0°。

**竪坑** 上面は長径1.16m、短径1.00mの円形で、深さは1.45mである。底面は長径0.75m、短径0.55mの楕円形で、主室に向かってゆるやかに傾斜している。長軸方向はN-0°である。

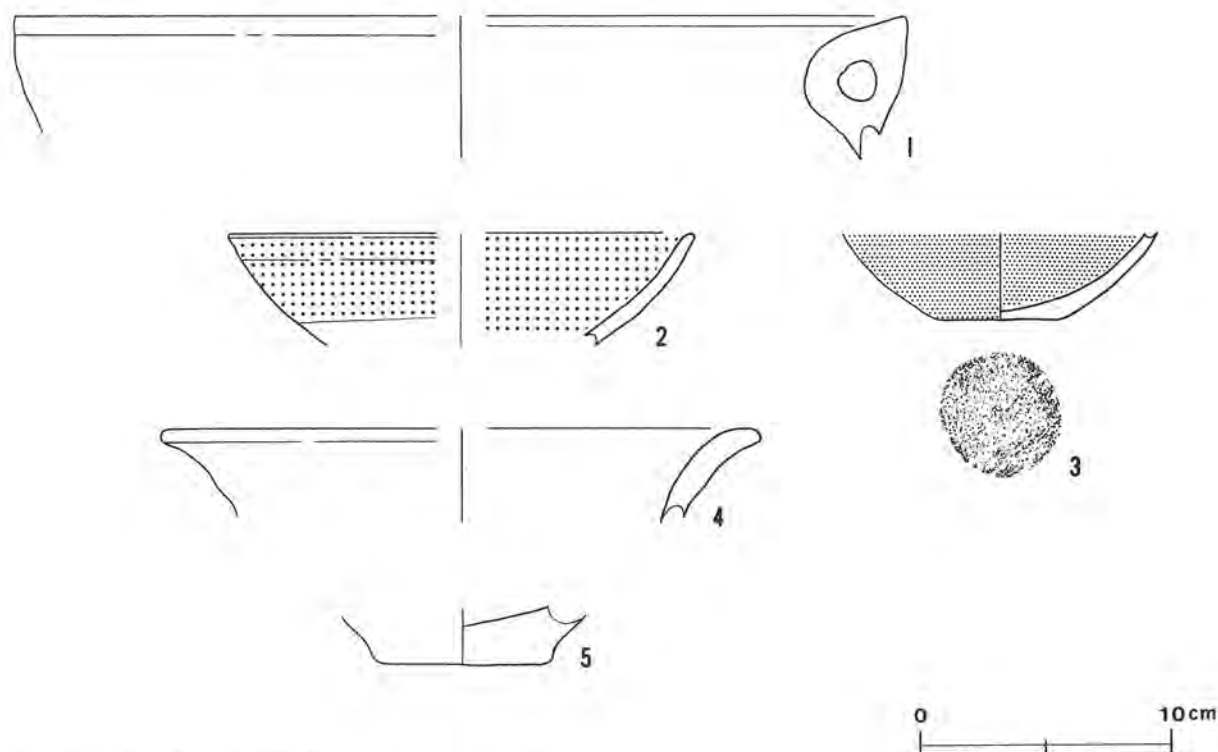
**主室** 底面は長軸2.40m、短軸1.40mの長方形をしており、平坦である。確認面から主室底面までの深さは1.60mで、長軸方向はN-88°-Wである。

**壁** 主室、竪坑ともほぼ垂直に立ち上がっている。

**覆土** 9層からなる。1・2層はローム小ブロックを微量、ローム粒子を少量含む黒褐色土または黒色土である。3～5層は、ローム小ブロック、ローム粒子を微量含む褐色土または暗褐色土である。6・7層はロームの中・小ブロックを微量、ローム粒子を中量含む黒褐色土または褐色土である。8・9層は鹿沼パミスを多量に含むぶい橙色土または褐色土である。覆土がブロック状をしており、人為堆積と考えられる。

**遺物** 覆土上層から第22図1の内耳鍋口縁部片、2の陶器口縁部片が出土している。3の土師器碗は混入と思われる。

**所見** 本跡は出土遺物から、15世紀後半から16世紀前半のものと考えられる。



第22図 第6号地下式竈出土遺物実測図

第6号地下式竈出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第22図 1	内耳鍋 土師質土器	A [35.8] B ( 5.7)	口縁部片。口縁部は直立気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい黄橙色 普通	P53 5% 覆土 体部外面煤付着
2	皿 陶器	A [18.6] B ( 4.5)	口縁部片。口縁部は不明瞭な稜を持ち、やや外傾する。	釉は口縁部に施されている。	灰白色 (釉) 灰オリーブ色 良好	P54 10% 覆土
3	碗 土師器	B ( 3.5) C ( 5.0)	底部片。平底。	内・外面赤彩。	砂粒・雲母・石英 にぶい赤褐色 普通	P55 25% 覆土
4	甕 土師器	A [24.0] B ( 3.8)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・石英 にぶい橙色 普通	P56 5% 覆土
5	甕 土師器	B ( 2.3) C 7.2	底部片。平底。	外面ヘラナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P57 5% 覆土

第7号地下式墳 [SK-31] (第14図)

位置 調査区の東側，C4f7区を中心に確認。本跡は南側の調査区外にのびている。

主軸方向 [N-18°-W]。

重複関係 本跡の主室の西部は，第4号住居跡を掘り込んでいる。

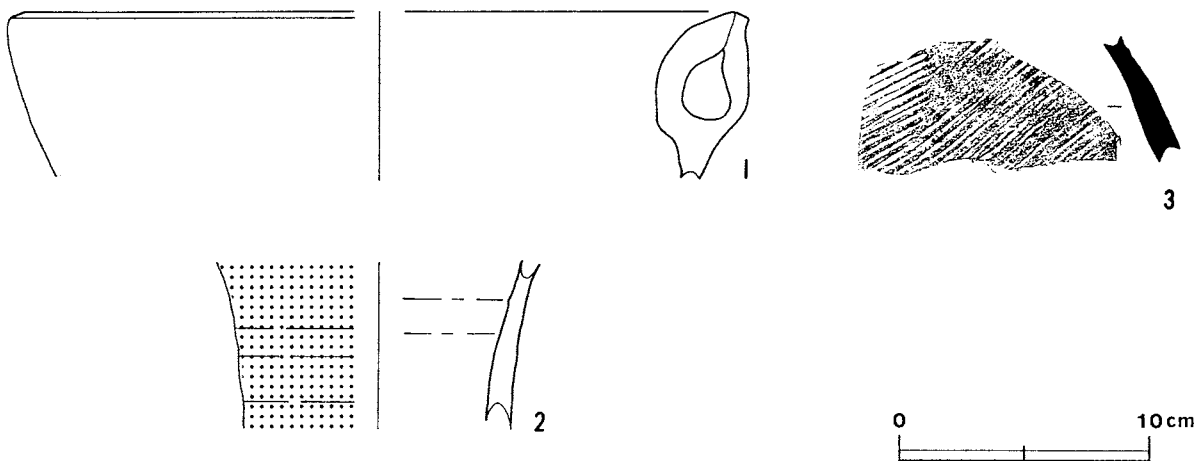
主室 底面の位置までは確認できなかったが，長軸(2.20)m，短軸(1.40)mの長方形をしており，確認面から主室底部までの深さは[2.20]mである。

壁 主室はオーバーハングがみられる。

覆土 22層からなる。1～7層はローム小ブロック，ローム粒子を少量含む黒褐色土である。8層はローム小ブロックを中量含む褐色土である。9層はローム粒子を少量含む極黒褐色土である。10～20層はローム粒子を少量含む黒色土である。21層は黒色粒子を中量含む褐色土である。22層はローム粒子を微量含む黒褐色土である。覆土がブロック状になっており，人為堆積と考えられる。

遺物 覆土上層から第23図1の内耳鍋口縁部片，2の陶器花瓶頸部片が出土している。

所見 本跡は出土遺物から，15世紀後半から16世紀前半のものと考えられる。



第23図 第7号地下式墳出土遺物実測・拓影図

第7号地下式墳出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第23図 1	内耳鍋 土師質土器	A [29.4] B (6.7)	口縁部片。口縁部は直立気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	雲母・スコリア にふい赤褐色 普通	P58 5% 覆土 体部外面煤付着
2	花瓶 陶器	B (6.8)	頸部片。頸部は不明瞭な稜を持ち，外傾しながら立ち上がる。	内面ロクロ痕。外面釉。	褐灰色 (釉) オリーブ灰色 良好	P59 10% 覆土 瀬戸産

3は須恵器甕の体部片である。平行叩き目が施されている。

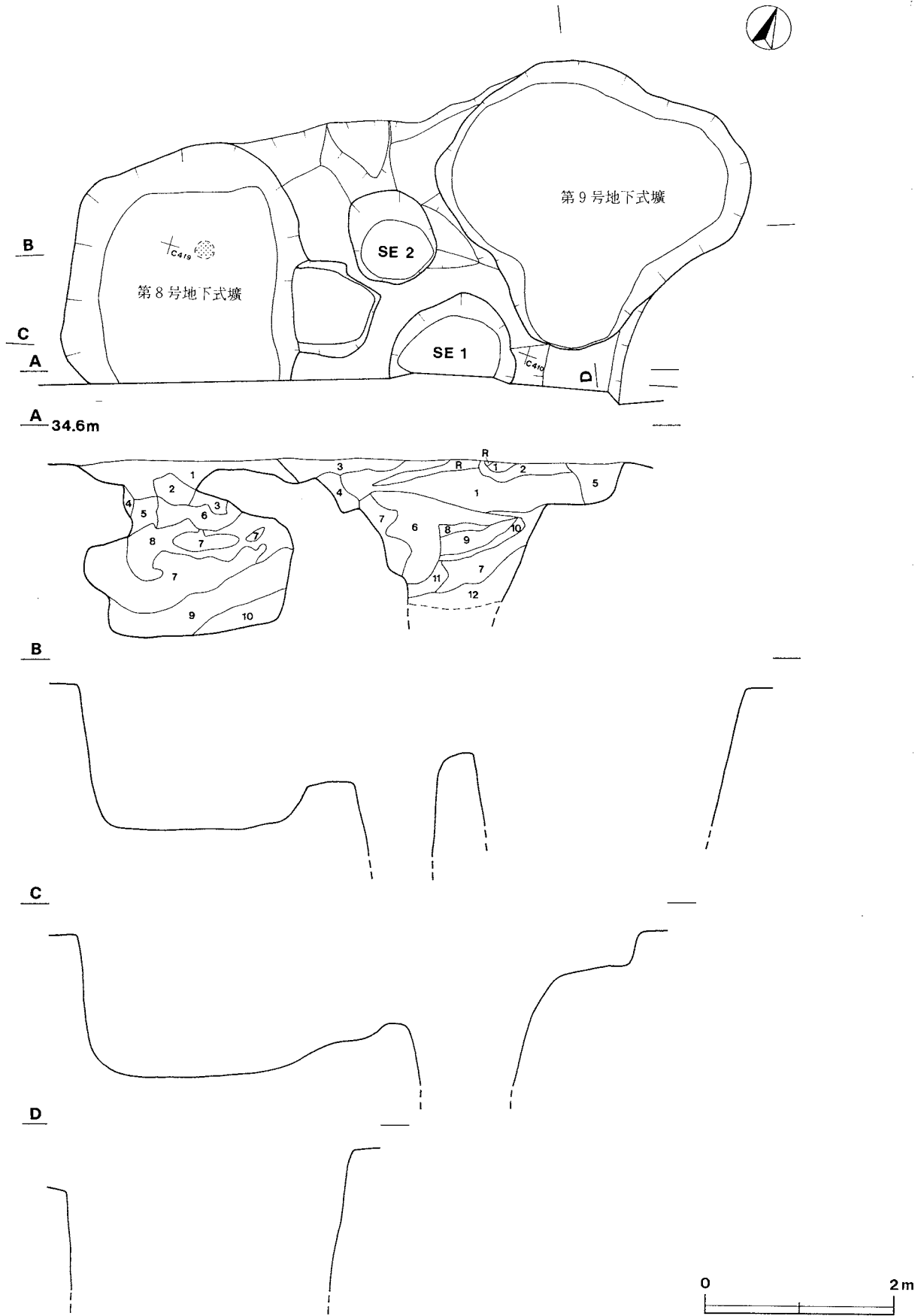
第8号地下式墳 [SK-32] (第24図)

位置 調査区の東側，C4f9区を中心に確認。本跡は南側の調査区外にのびている。

主軸方向 N-74°-E。

竪坑 一辺が0.80mの方形で，深さは1.50mである。主室に向かってゆるやかに傾斜している。長軸方向はN-74°-Eである。

主室 底面は，長軸(2.00)m，短軸1.30mの長方形で平坦である。確認面から主室底面までの深さは1.55m



第24图 第8・9号地下式壙・第1・第2号井戸実測図



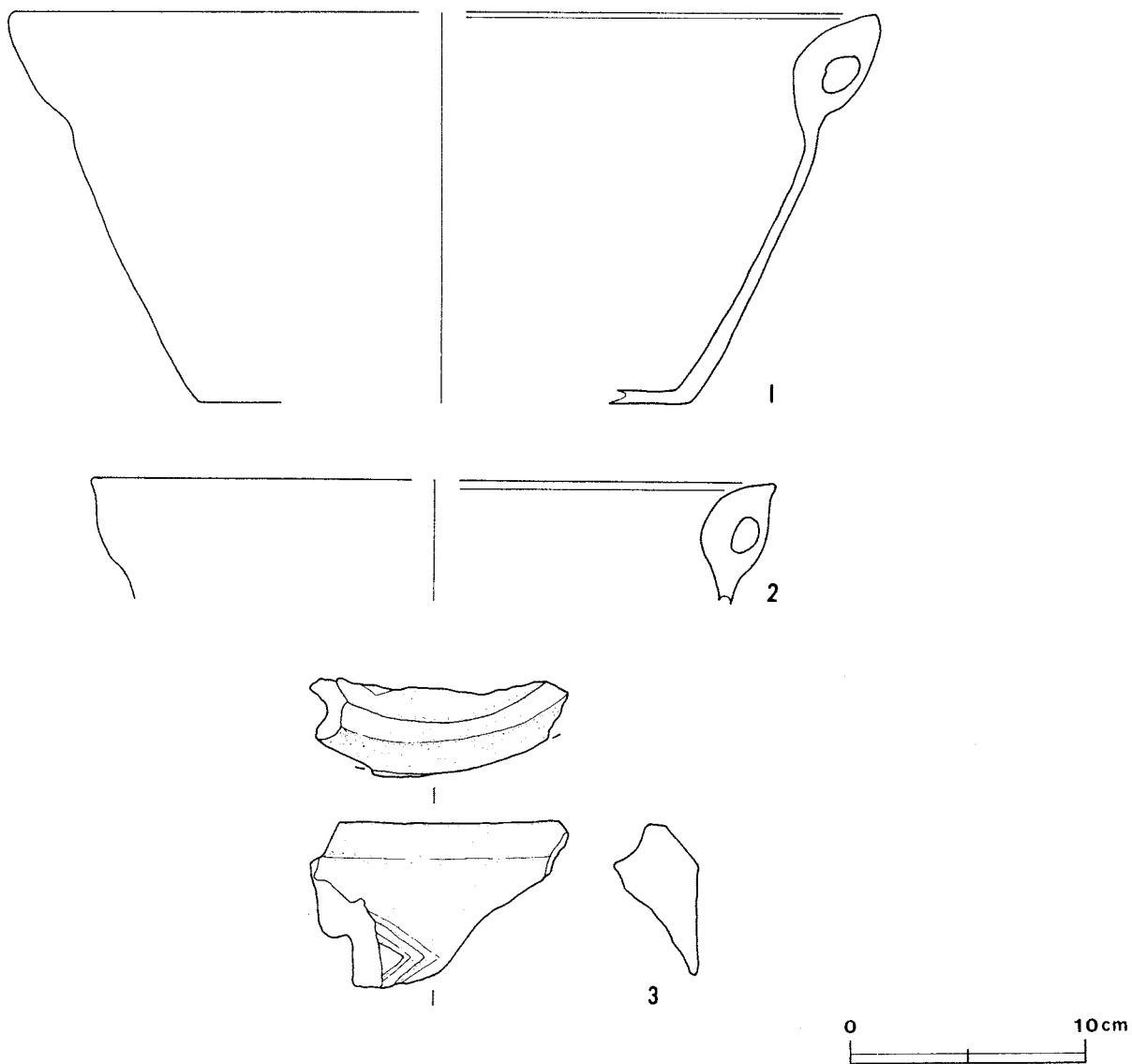
である。長軸方向はN-19°-Wである。底面中央部から少量の焼土を確認した。

**壁** ほぼ垂直に立ち上がっている。

**覆土** 10層からなる。1層はローム小ブロックを少量含む黒褐色土である。2・3層は粘土ブロックを含む橙色土で粘性、しまりとも強い。4層はローム粒子を少量含む黒色土である。5・6層は粘土小ブロックを微量含む黒色土または黒褐色土である。7層は粘性しまりとも強い褐色土である。8・9層は粘土ブロックを含む暗褐色土または明茶褐色土である。10層はローム小ブロックを含む暗褐色土である。覆土に粘土ブロックが含まれるなど、人為堆積と考えられる。

**遺物** 主室底面直上から第25図1・2の内耳鍋片が出土している。

**所見** 本跡は出土遺物から、15世紀後半から16世紀前半のものと考えられる。



第25図 第8号地下式墳出土遺物実測図

第8号地下式墳出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第25図 1	内耳鍋 土師質土器	A [37.2] B (16.6) C [20.6]	平底。体部から口縁部にかけて外傾気味に立ち上がる。	体部内・外面ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 暗赤褐色 普通	P60 20% 覆土 体部外面煤付着

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
2	内耳鍋 土師質土器	A [29.1] B (5.2)	口縁部片。口縁部は外傾しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英 にふい橙色 普通	P61 5% 覆土 体部外面煤付着

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
3	石臼	(7.6)	(11.2)	(3.2)	(210.0)	安山岩	覆土	Q14 上白

### 第9号地下式墳 [SK-33] (第24図)

位置 調査区の東側，C4e0区を中心に確認。

主軸方向 N-20°-W。

竪坑 長軸0.80m，短軸0.70mの台形で，深さは(2.45)mである。長軸方向はN-20°-Wである。

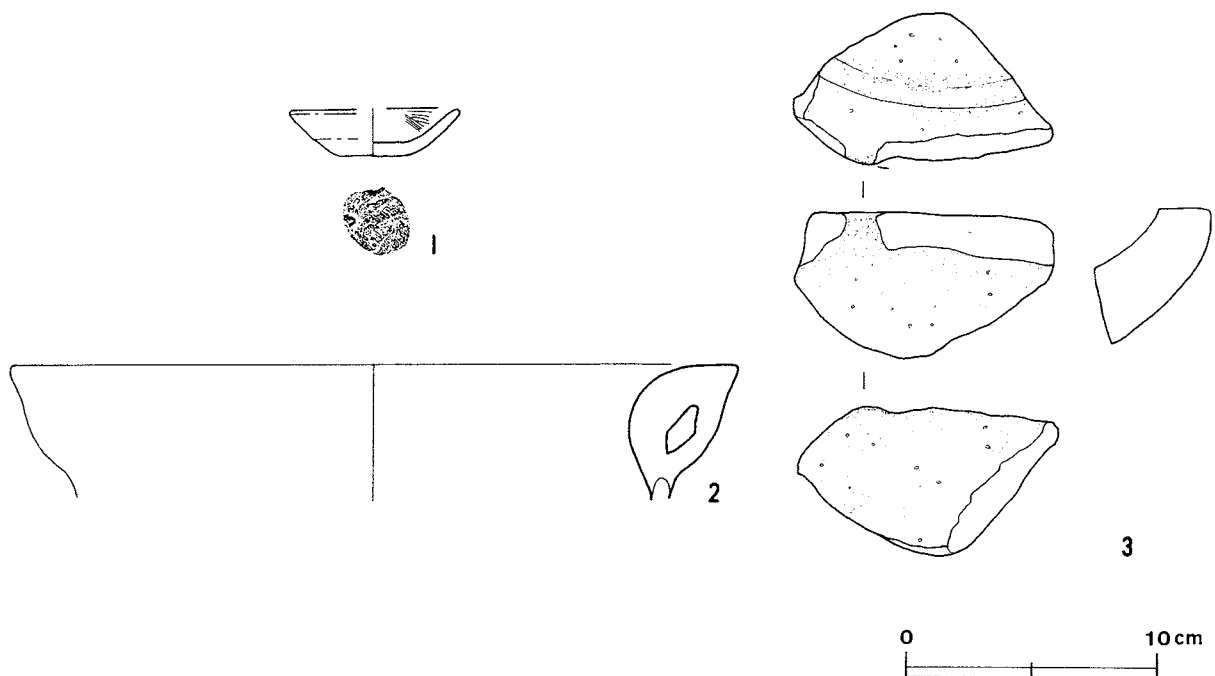
主室 底面まで確認できなかったが，長軸(2.95)m，短軸(1.80)mの隅丸長方形をしている。深さは(2.45)mで，長軸方向はN-71°-Eである。

壁 ほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土 断面が崩落してしまい不明である。

遺物 覆土上層から第26図1の土師質皿，2の内耳鍋口縁部片が出土している。

所見 本跡は出土遺物から，15世紀後半から16世紀前半のものと考えられる。



第26図 第9号地下式墳出土遺物実測図

第9号地下式墳出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第26図 1	皿 土師質土器	A [6.8] B 1.9 C 2.8	平底。体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母 にふい橙色 普通	P62 40% 覆土
2	内耳鍋 土師質土器	A [29.0] B (5.5)	口縁部片。口縁部は外傾しながら立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・雲母 明赤褐色 普通	P63 5% 覆土 体部外面煤付着

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
3	石白	(11.5)	(5.4)	3.2	(230.0)	安山岩	覆土	Q15 上白

### 3 土坑

当遺跡からは、22基の土坑が確認されたが、出土遺物が少なく時期や性格について不明確な点が多い。ここでは、土坑のうち形状や規模、覆土の状態や出土遺物について特徴のある3基の土坑について説明を加え、その他は一覧表(表3)に記載した。

#### 第1号土坑(第28図)

**位置** 調査区の西側、D2b<sub>9</sub>区を中心に確認。

**規模と平面形** 長径2.60m、短径1.20mの長楕円形で、深さは0.55mである。

**長径方向** N-15°-W。

**壁面** なだらかに立ち上がっている。

**底面** 凹凸である。

**覆土** 4層からなる。2層は橙色土で焼土である。1・3・4層は焼土粒子、ローム粒子を少量含む黒褐色土または褐色土である。

**遺物** 土師器甕体部片が出土している。

**所見** 時期や性格については不明である。

#### 第4号土坑(第28図)

**位置** 調査区の西側、D3b<sub>7</sub>区を中心に確認。

**規模と平面形** 長径0.90m、短径0.65mの楕円形で、深さは0.68mである。

**長径方向** N-30°-W。

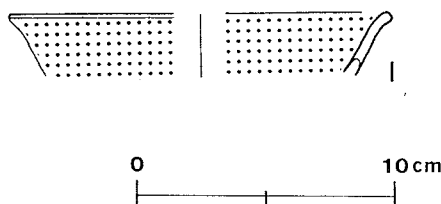
**壁面** 底面付近で内傾したあとは、ほぼ垂直に立ち上がる。

**底面** 平坦である。

**覆土** 1層でローム小ブロック、ローム粒子を少量含む黒褐色土である。

**遺物** 覆土中層から第27図1の磁器碗口縁部片が出土している。

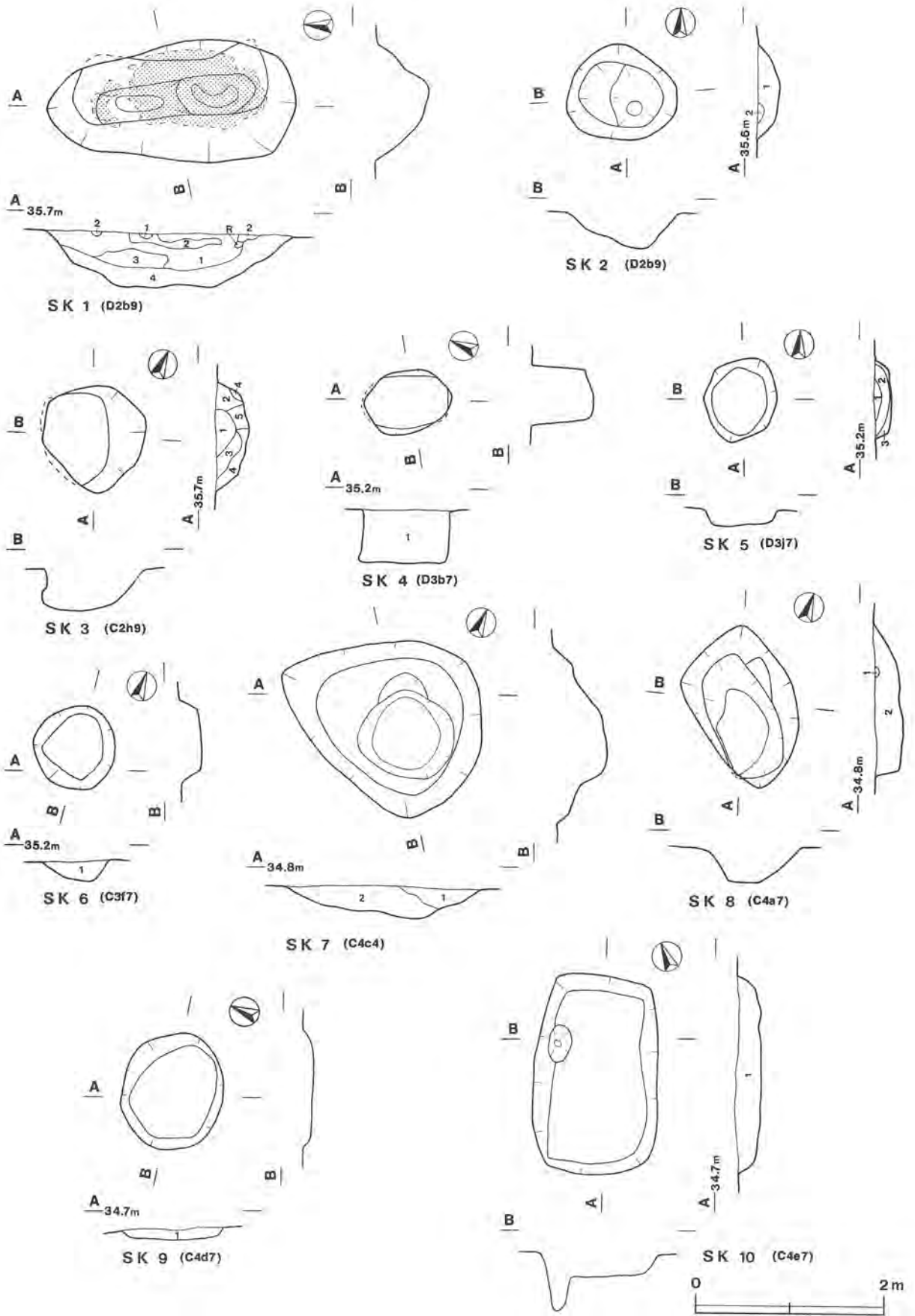
**所見** 時期や性格については不明である。



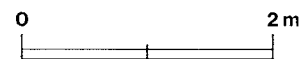
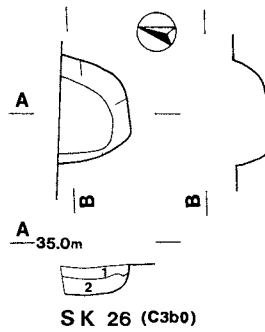
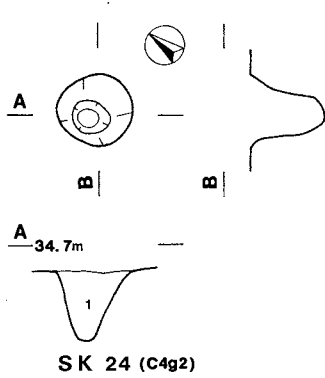
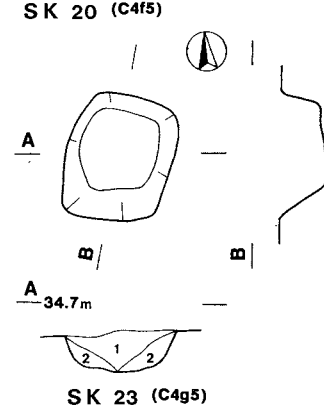
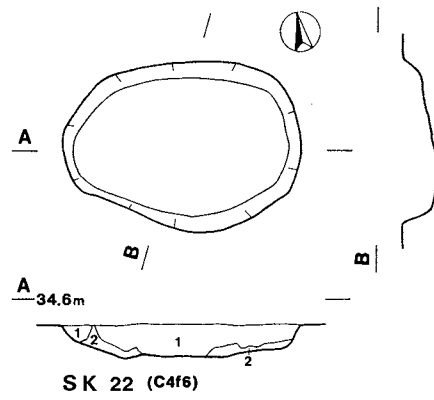
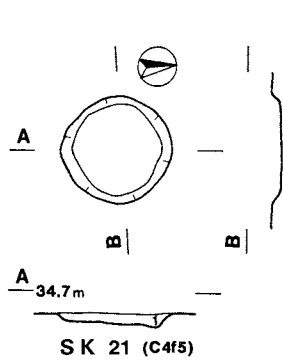
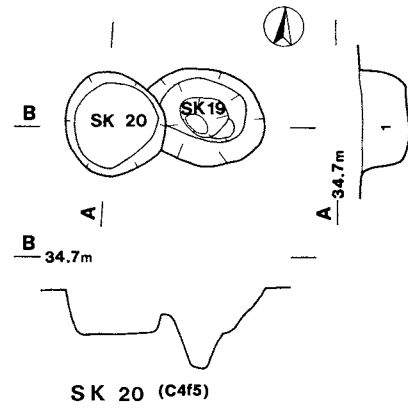
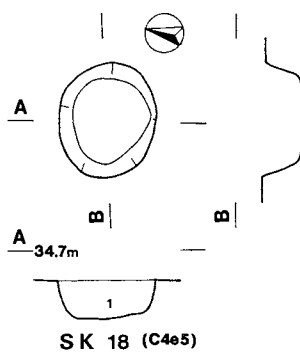
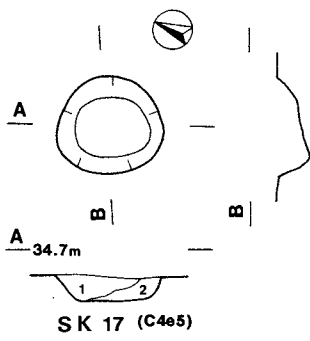
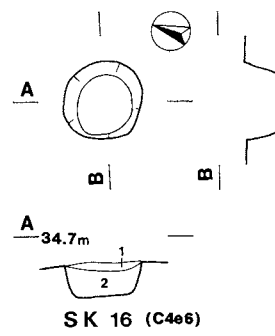
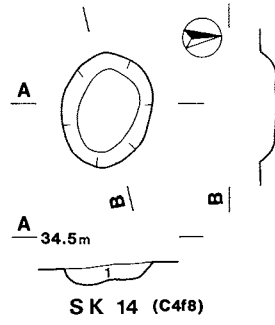
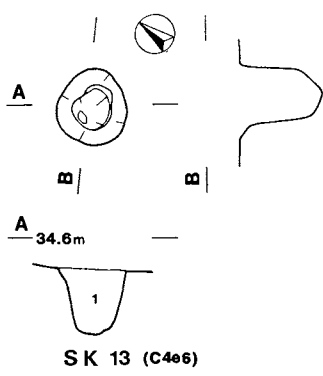
第27図 第4号土坑出土遺物実測図

#### 第4号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第27図 1	碗 青磁	A [14.8] B (2.5)	口縁部片。口縁部は外傾しながら立ち上がる。	内・外面釉。釉は均一に施されている。	灰白色(釉) 緑灰色 良好	P41 5% 覆土 龍泉窯



第28図 土坑実測図(1)



第29図 土坑実測図(2)

土坑土層解説

SK-1

- 1 黒色 焼土粒子微量, ローム粒子少量
- 2 橙褐色 黒色小ブロック少量
- 3 灰褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量
- 4 褐色 焼土粒子少量

SK-2

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 黒色粒子少量

SK-3

- 1 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 黒色粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量
- 5 明褐色 黒色粒子微量

SK-4

- 1 黒褐色 ローム粒子少量

SK-5

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 黒色粒子少量

SK-6

- 1 黒色 ローム粒子少量

SK-7

- 1 灰褐色 ローム中ブロック, ローム粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子少量

SK-8

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 灰褐色 ローム中ブロック, ローム粒子微量

SK-9

- 1 黒色 ローム小ブロック微量

SK-10

- 1 暗褐色土 ローム小ブロック, ローム粒子少量

SK-13

- 1 黒色 ローム粒子少量

SK-14

- 1 暗褐色 炭化粒子少量, ローム粒子少量

SK-16

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

SK-17

- 1 褐色 黒色粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

SK-18

- 1 黒色 炭化粒子少量, ローム粒子微量

SK-20

- 1 極暗褐色 炭化粒子少量, ローム小ブロック少量

SK-21

- 1 黒色 ローム粒子微量

SK-22

- 1 黒褐色 粘土粒子微量
- 2 褐色 粘土中ブロック微量

SK-23

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 黒色粒子中量

SK-24

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子少量

SK-26

- 1 褐色 黒色粒子中量
- 2 明褐色 ローム粒子中量

第10号土坑 (第28図)

位置 調査区の中央部, C4e7 を中心に確認。

規模と平面形 長軸 2.10 m, 短軸 1.30 m の長方形で, 深さは 0.28 m である。

長軸方向 N-27°-E。

壁面 ほぼ垂直である。

底面 平坦であるが, 北コーナー付近に長軸 0.40 m, 短軸 0.24 m の楕円形で, 深さ 0.35 m のピットがある。

覆土 1層でローム小ブロック, ローム粒子を少量含む暗褐色土である。

遺物 土師器甕体部片が出土している。

所見 時期や性格については不明である。

表3 土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考	図版番号
				長径×短径 (m)	深さ (cm)						
2	D2b9	N-15°-W	円形	2.60×1.20	55	緩斜	鍋底	自然			第28図
3	C2h9	N-28°-W	円形	0.65×0.60	45	外傾	鍋底	自然			28
5	C3j7	N-8°-E	楕円形	0.95×0.75	22	緩斜	皿状	自然			28
6	C3f7	N-30°-W	円形	0.90×0.90	20	外傾	皿状	自然			28
7	C4c4	N-90°	楕円形	2.25×1.80	57	緩斜	鍋底	自然	土師器片, 須恵器片		28
8	C4a7	N-47°-W	不整長方形	1.55×1.08	35	外傾	平坦	自然			28
9	C4d7	N-85°-W	円形	1.25×1.10	10	緩斜	皿状	自然			28
13	C4e6	N-55°-E	楕円形	0.70×0.55	65	垂直	鍋底	自然			29
14	C4f8	N-55°-E	楕円形	0.95×0.72	12	外傾	皿状	自然			29
16	C4e6	N-34°-W	円形	0.68×0.62	30	垂直	鍋底	自然			29
17	C4e5	N-28°-W	円形	0.88×0.85	22	緩斜	皿状	自然			29
18	C4e5	N-85°-E	円形	0.90×0.78	30	垂直	平坦	自然			29
19	C4f5	N-76°-E	円形	0.88×0.81	34	垂直	鍋底	自然			29
20	C4f5	N-76°-E	不整楕円形	1.99×1.04	72	垂直	平坦	自然			29
21	C4f5	N-0°	円形	0.91×0.85	11	外傾	皿状	自然			29

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考	図版番号
				長径×短径 (m)	深さ (cm)						
22	C4f6	N-73°-W	楕円形	1.95×1.35	28	外傾	皿状	自然	土師器片		第29図
23	C4g5	N-6°-E	方形	1.00×0.85	35	外傾	平坦	自然			29
24	C4g2	N-53°-E	円形	0.60×0.56	61	緩斜	鍋底	自然			29
26	C3b0	N-20°-W	[楕円形]	[1.10]×0.85	25	緩斜	皿状	自然			29

#### 4 井戸

当遺跡の東側から2基の井戸を確認した。井戸の回りには、地下式墳が確認されている。各井戸の構築時期や性格については、出土遺物も少なく不明な点が多い。

##### 第1号井戸 (第24図)

**位置** 調査区の東側、C4f<sub>9</sub>区を中心に確認。

**規模と形状** 掘り方は、上面が長径3.70m、短径3.20mの楕円形で、確認面から1.60mの深さまでロート状をしている。底面までは確認していない。

**覆土** 12層からなる。1～4層はローム粒子を少量含む黒褐色土または暗褐色土である。5～8層はローム粒子を微量含む黒色土または黒褐色土である。9～12層はローム粒子を中量含む暗褐色土または極暗褐色土である。堆積状態より埋めもどされたと考えられる。

**遺物** 覆土上層から第30図1の土師質皿、3の播鉢底部片、6の火鉢底部片が出土している。

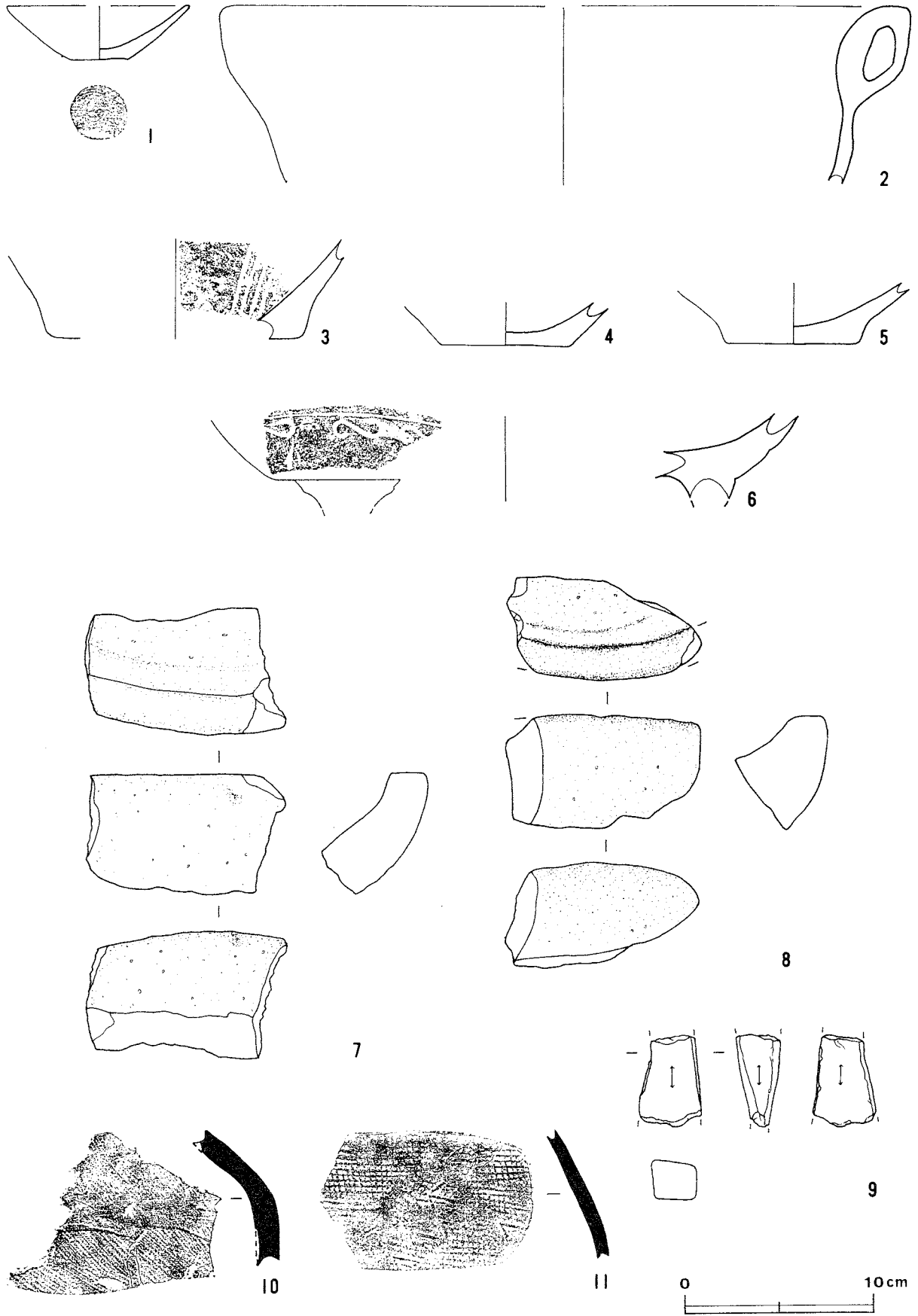
**所見** 出土遺物より16世紀以前のものと考えられる。

##### 第1号井戸出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第30図 1	皿 土師質土器	A [ 9.8] B 2.9 C 3.0	平底。体部は直線的に立ちあがる。	水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・石英 灰白色 普通	P65 60% 覆土
2	内耳鍋 土師質土器	A [36.4] B ( 9.4)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P66 5% 覆土 体部外面煤付着
3	播鉢 土師質土器	B ( 5.3) C [13.2]	底部片。	内面に4本播目が付けられている。	砂粒・雲母・石英 褐色 普通	P67 5% 覆土
4	甕 土師器	B ( 2.3) C 7.0	底部片。平底。	底部外面ヘラナデ。	砂粒・雲母・長石 スコリア にぶい橙色 普通	P68 5% 覆土
5	甕 土師器	B ( 3.2) C 7.0	底部片。平底。	底部内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P70 5% 覆土
6	火鉢 土師質土器	B ( 4.8)	底部片。台形状の脚が付く。	体部下位にS字状文を施す。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P69 10% 覆土

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
7	石 白	( 10.2)	( 6.2)	( 2.4)	(360.0)	安山岩	覆 土	Q20 上白
8	石 白	( 9.5)	( 5.4)	( 4.5)	(270.0)	安山岩	覆 土	Q21 上白
9	砥 石	( 4.9)	2.3	2.2	( 40.0)	泥 岩	覆 土	Q22

10・11は須恵器甕の体部片である。10には平行叩き目が施されている。11には格子状叩き目が施されている。



第30图 第1号井戸出土遺物実測・拓影図



第2号井戸 (第24図)

位置 調査区の東側, C4e9区を中心に確認。

規模と形状 上面は崩落により確認できない。確認面より1.00mで、長径1.00m、短径0.75mの楕円形をしており、それより下は円筒形である。底面までは確認していない。

覆土 断面が崩落してしまい、不明である。

所見 時期は不明である。

5 溝

当遺跡からは、2条の溝が確認されている。1号溝は南北に、2号溝は東西に伸びており、調査区外で交差すると思われる。構築時期や性格については、出土遺物も少なく不明な点が多い。

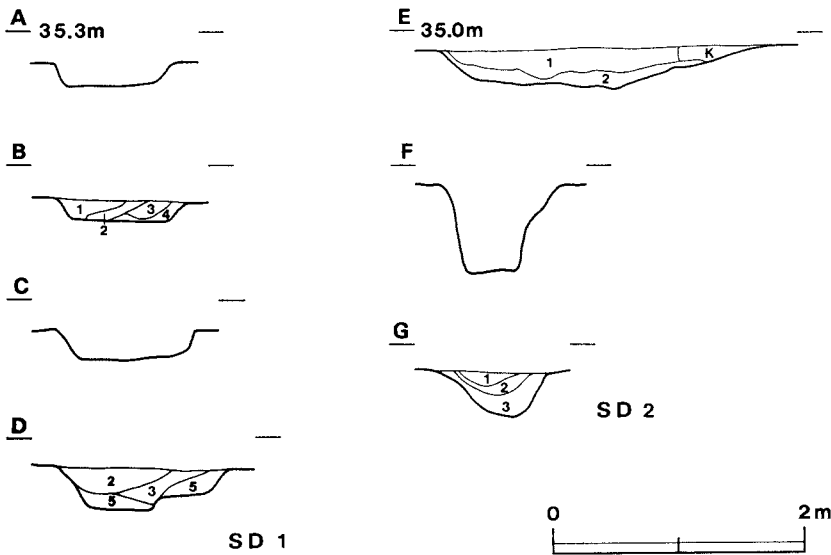
第1号溝 (附図, 第31図)

位置 調査区の中央部, C3区を中心に確認。

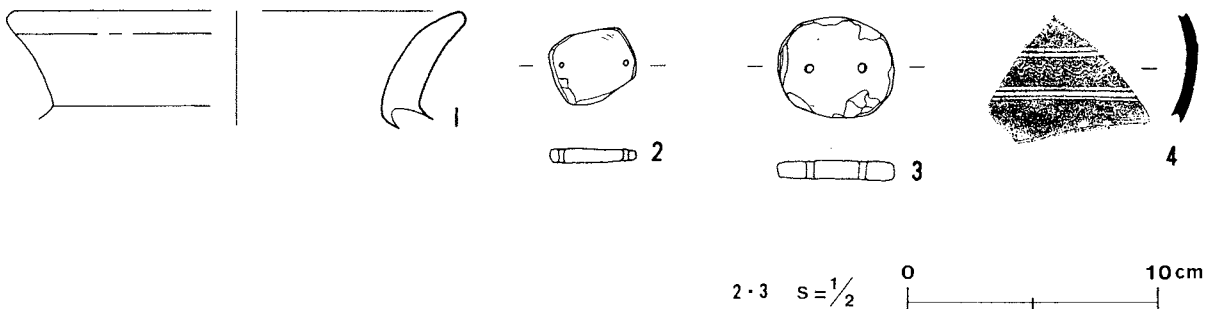
規模と形状 上幅1.10m、下幅0.80m、深さ0.25m、全長(21)mで断面形は「U」字状をしている。

方向 N-5°-W。

覆土 5層からなる。ローム粒子を少量含む黒褐色土又は灰褐色土である。自然堆積と考えられる。



第31図 第1・2号溝断面・土層実測図



第32図 第1・2号溝出土遺物実測・拓影図

遺物 溝中央部の覆土上層から第32図2の石製双孔円板が出土している。

所見 本跡はボーリング調査の結果、調査区外で2号溝と交差すると考えられる。時期や性格については不明である。

### 第1・2号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第32図 1	甗 土師器	A [18.4] B (4.7)	口縁部片。口縁部は外傾気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母にふい橙色普通	P64 5% 覆土

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
2	双孔円板	2.1	2.4	0.6	8.0	滑石	覆土	Q18
3	双孔円板	2.6	3.1	0.5	8.0	滑石	覆土	Q19

4は須恵器隴の体部片である。2条の沈線が施されている。

### 第2号溝 (附図, 第31図)

位置 調査区の東側, C4区を中心に確認。

規模と形状 上幅1.00m, 下幅0.50m, 深さ0.40m, 全長(6.00)mで断面形は「U」字状をしている。

方向 N-85°-E。

覆土 3層からなる。ローム粒子を少量含む黒色土または暗褐色土である。自然堆積と考えられる。

遺物 溝中央部の覆土上層から第32図3の石製双孔円板が出土している。

所見 本跡はボーリング調査の結果、調査区外で1号溝と交差すると考えられる。時期や性格については不明である。

## 6 遺構外出土遺物

当調査区の遺構外から土師器・須恵器・陶器・石製品・鉄製品・古銭などの遺物が出土している。ここでは、表や拓影図でその一部を掲載する。

### 遺構外出土遺物観察表

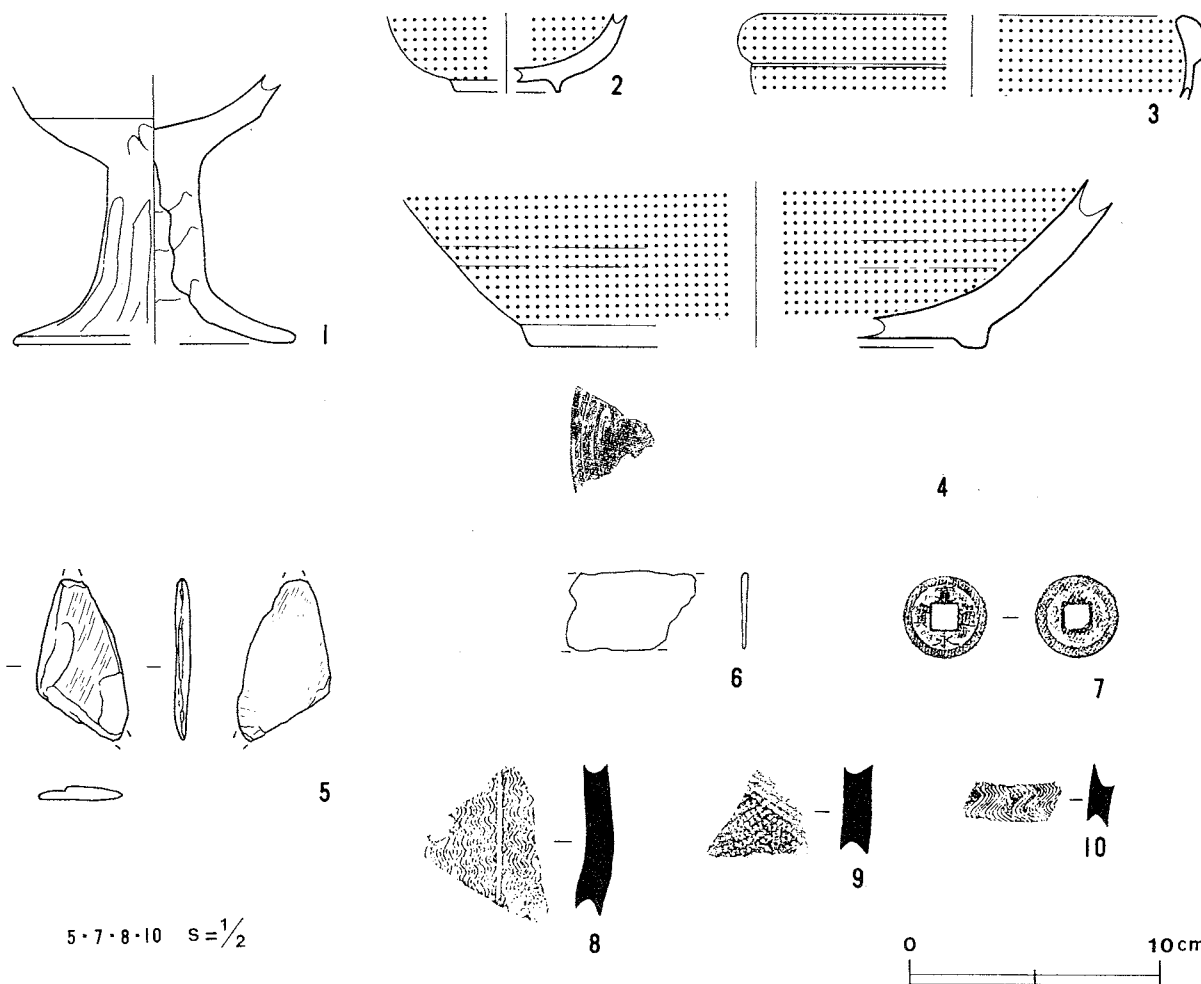
図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33図 1	高土 土師器	B (10.8) D [11.2] E 8.7	坏部欠損。脚部は円筒状をして、裾部で開く。	脚部外面縦方向のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英明赤色普通	P71 60%
2	碗 陶器	B (3.2) C [4.2]	底部片。高台部の断面は「U」字状である。	内・外面に釉が施されている。	灰白色(釉)黒褐色良好	P72 10% 瀬戸産
3	碗 陶器	A [16.8] B (3.3)	口縁部片。口縁部は内彎気味に立ち上がる。	内・外面に釉が施されている。	明灰褐色(釉)黄褐色良好	P73 5% 瀬戸産
4	捏陶 鉢器	B (6.8) C [9.0]	底部片。高台部の断面は「U」字状である。	内・外面に釉が施されている。	灰白色(釉)黄褐色普通	P74 5% 瀬戸産

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
5	剣形模造品	4.4	2.5	0.4	8.0	滑石	表採	Q23

図版番号	器種	計測値				備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
6	鎌	(5.2)	3.2	0.2	(5.0)	M3 表採破片

図版番号	鑄名	初鑄年(西暦)	鑄造地名	出土地点	備考
7	寛永通寶	1668	日本	表採	M4

9は須恵器甕の体部片である。格子状叩き目が施されている。8・10は須恵器片である。体部には縦方向の波状文が施されている。



第33図 遺構外出土遺物実測・拓影図

## 第4節 まとめ

当調査区からは、縄文時代中期、古墳時代中期および中世の遺構・遺物が確認されている。縄文時代を時期別に見ると、中期中葉の阿玉台式、中期後葉の加曾利E式の土器片が出土しているが、遺構は確認できなかった。古墳時代の遺構は、調査区の中央付近から中期の住居跡が確認されている。中世の遺構は、調査区の東側から地下式墳、井戸などが確認されている。

ここでは古墳時代中期の住居跡と中世の地下式墳についてまとめたい。

### 1 竪穴住居跡について

当調査区から確認された古墳時代の竪穴住居跡4軒は、いずれも古墳時代中期（和泉期）のものである。第1号住居跡は平面形が6.18×4.50mの長方形をしており、今回調査した住居跡の中では大型であった。5本の支柱穴と、出入り口施設に伴うピットがあり、地床炉は住居跡の北側に2基付設されている。出土遺物は坏・埴・甕・甑・石製模造品・砥石・鉄鏃など27点である。特に埴がコーナー付近からまとまって9点出土している。埴は体部が内彎しながら立ち上がり、口縁部が内傾するものが多いが、体部と口縁部との境に稜をもち外傾するものも2点出土している。第2号住居跡からは、須恵器の樽形甗が出土している。樽形甗は、県内では新治村田宮榎の宮遺跡から出土しており、今回は2例目の出土である。残念ながら体部片しか出土しておらず全容は分からないが、体部の中心が大きくふくらむビヤ樽形のもので、5本櫛歯の波状文が体部中央に縦方向に施されている。形態的に、TK216からTK208の間に位置付けられると考えられる。第3号住居跡は方形をしており4本の支柱穴がみられる。出入り口施設は東側にあり、炉は持たない。床面からは青白色の粘土の塊が出土し、遺物は土師器片が出土しただけであった。このような点から、一般の住居とは異なる性格のものであろう。

これらの住居跡の年代は、出土遺物から5世紀後葉で、すべて同時期のものと思われる。住居跡の配置はほぼ同じ間隔をもって配置されており、大型、中型、小型の住居が1つのグループをなしている。このような組み合わせは、同時期の集落跡が確認されている西茨城郡岩瀬町裏山遺跡、牛久市ヤツノ上遺跡、中久喜遺跡などでもみられる。当遺跡もこの時期の一般的な集落のひとつといえよう。

### 2 地下式墳について

当調査区からは、地下式墳9基が確認されている。地下式墳の平面形は「□」型をしている。竪坑は円形、楕円形、長方形などがあるが、主室は長方形をしているものが多く、長軸2.20～2.95m、短軸1.30～1.80m、深さは1.48～2.45mである。南方向に竪坑を持ち、北方向に主室を持つものがほとんどである。出土遺物は土師質土器（皿・内耳鍋）、陶器、播鉢、石臼などである。

これまでの学説によれば、地下式墳は墓壇説や貯蔵庫説等が唱えられている。当遺跡について考えてみると、調査期間中に長雨により地下式墳に水が涌きだし、底面にかかりの水が溜まってしまい、なかなか引かないことがあった。このことを考えると、貯蔵庫として使用するには無理があると考えられる。地下式墳の形態や出土遺物は、これまでに確認された水戸市白石遺跡、筑波郡谷和原村西の脇遺跡とほぼ同じである。とくに白石遺跡からは人骨が出土している。本跡の第8号地下式墳底面からは少量の焼土がみられたが、人骨などは確認できず墓壇とする根拠も明確にできなかった。しかし、1号溝は南北に、2号溝は東西に伸びており、この溝は調査区外で交差すると考えられる。遺構全体図にみられるように地下式墳を取り囲むように伸びていること

から、墓域としての性格をもつものと考えられ、当遺跡の地下式墳については、墓墳の可能性が高いと考えておきたい。

#### 注・参考文献

- (1) 大阪府教育委員会 「陶邑Ⅰ」 『大阪府文化財調査報告書第28集』 1976年3月
- (2) 中村 浩 『和泉陶邑窯の研究』 1981年11月
- (3) 土生 朗治 「常陸地方出土のⅠ期の須恵器の性格について」 『年報』10 茨城県教育財団1991年5月
- (4) 土生 朗治 「常陸地方出土のⅠ期の須恵器の性格について」 『研究ノート』創刊号茨城県教育財団1992年7月
- (5) 黒沢 彰哉 「新治村田村梶の宮遺跡出土の須恵器」 『婆良岐考古』第4号 1982年3月
- (6) 茨城県教育財団 「裏山遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告書第73集 1992年3月
- (7) 茨城県教育財団 「ヤツノ上遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告書第81集 1993年3月
- (8) 茨城県教育財団 「中久喜遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告書第86集 1993年9月
- (9) 江崎 武 「中世地下式墳の研究」 『古代探叢Ⅱ』 早稲田大学出版部 1985年12月
- (10) 茨城県教育財団 「白石遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告書第82集 1993年3月
- (11) 茨城県教育財団 「西ノ脇遺跡・前田村遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告書第87集 1994年3月

写 真 图 版

野 殿 深 作 遺 跡



野殿深作遺跡全景

PL 2



上 遺跡全景（北東から），下 地下式壙全景





上 第1号住居跡全景，下 第1号住居跡遺物出土狀況

PL 4

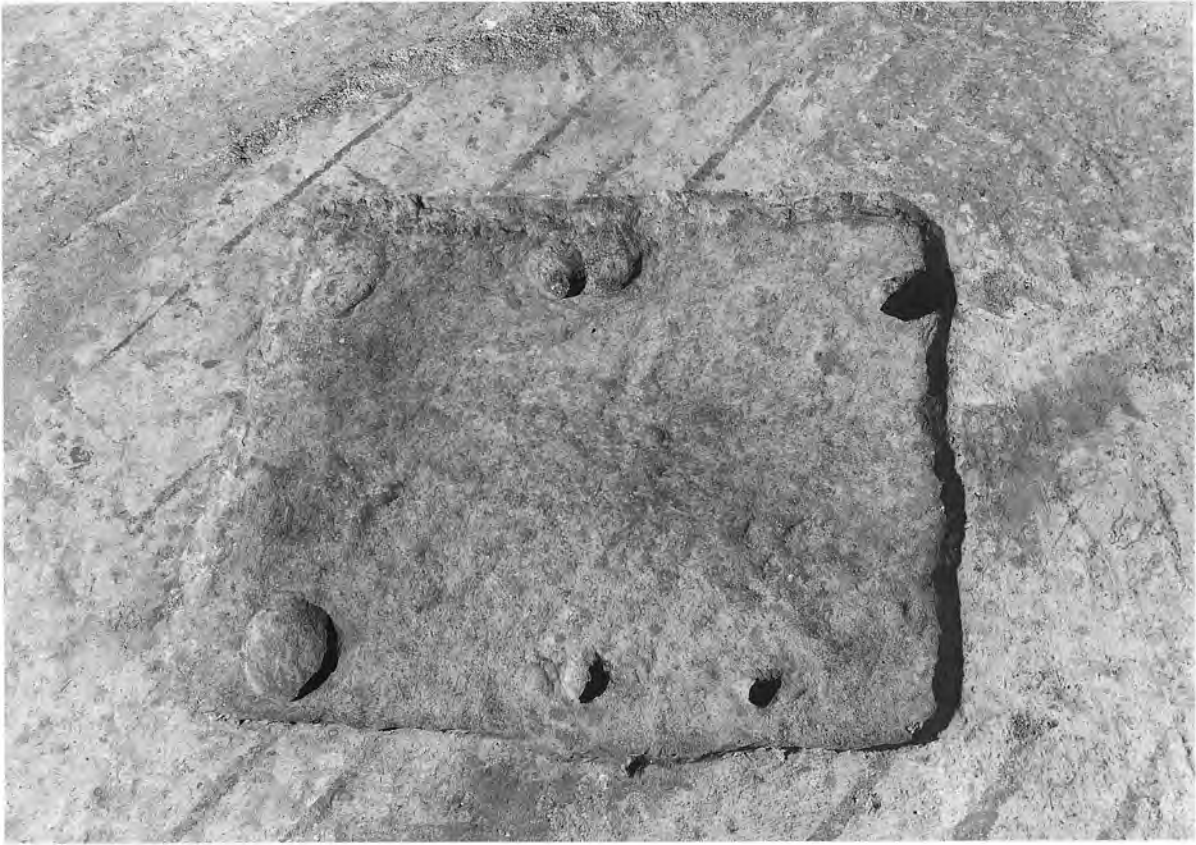


第1号住居跡遺物出土状況(1)



第1号住居跡遺物出土状況(2)

PL 6



上 第2号住居跡全景，下 第2号住居跡遺物出土狀況



上 第3号住居跡全景，下 第3号住居跡遺物出土狀況

PL 8



上 第4号住居跡・第7号地下式壙全景，下 第1・2号地下式壙全景



上 第3号地下式壙全景，下 第4号地下式壙全景



上 第5号地下式壙全景，下 第6号地下式壙全景





上 第5号地下式壙断面，中 第6号地下式壙断面  
下 第5·6号地下式壙断面

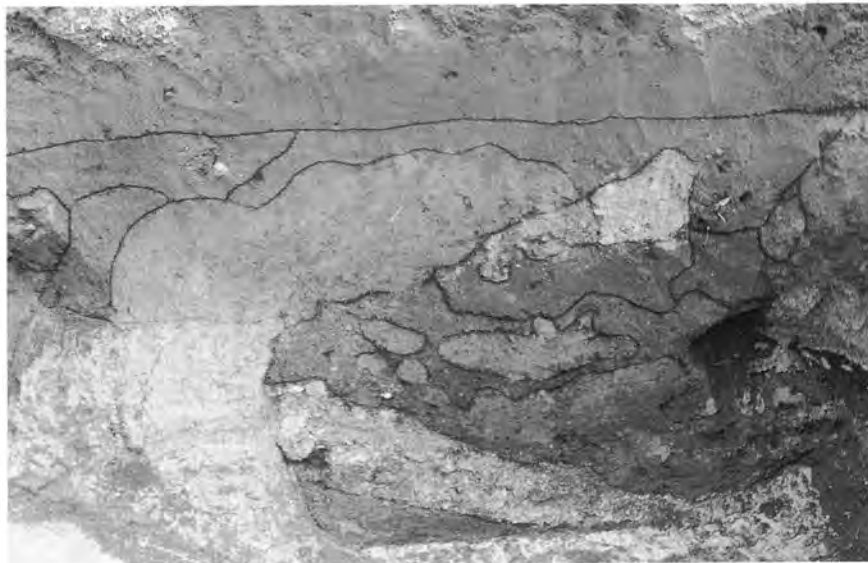
PL 12



上 第1号土坑全景, 中 第4号土坑全景, 下 第10号土坑全景



第8・9号地下式墳，第1・2号井戸全景



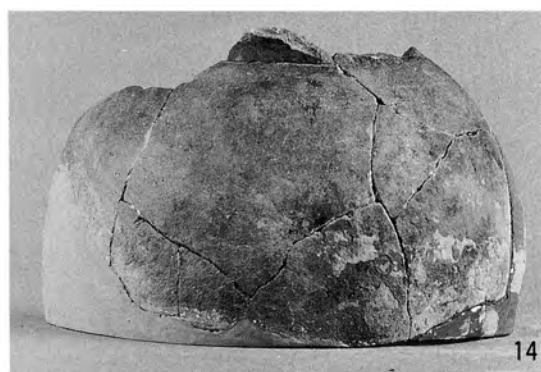
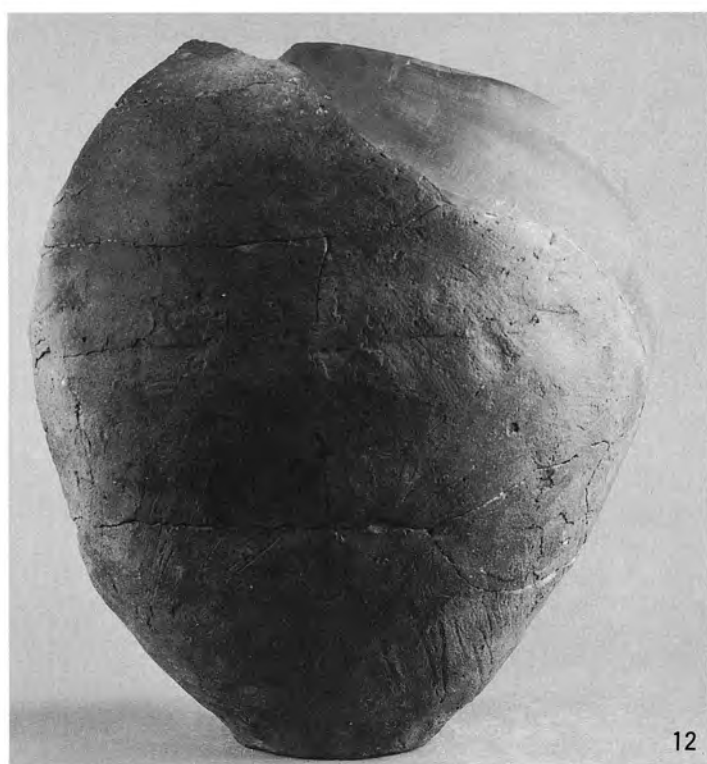
上 第8・9号地下式墳遺物出土状況  
中・下 第8号地下式墳，第1号井戸断面



第1号溝全景



第1号住居跡出土土器(1)

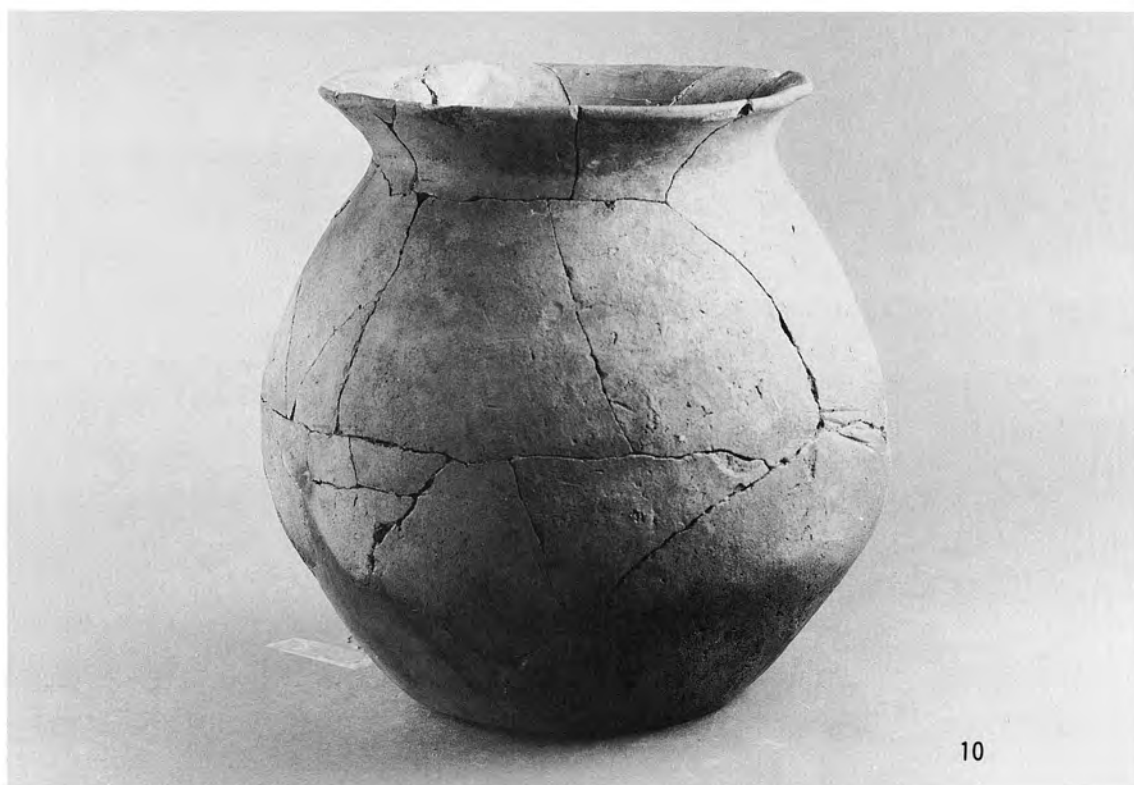
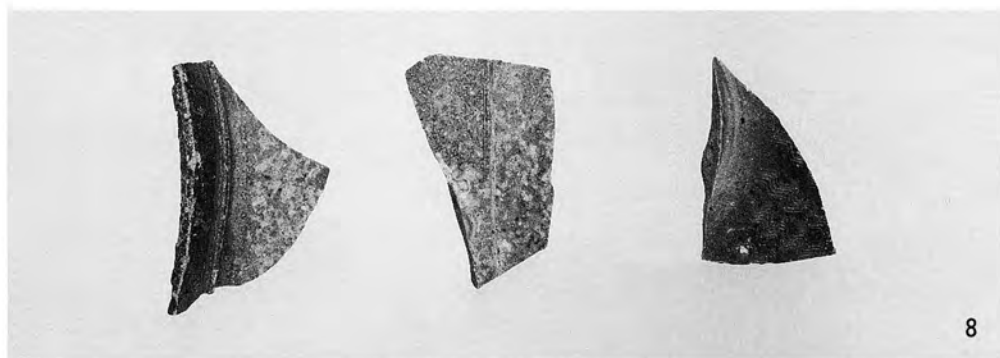


第1号住居跡出土土器(2)

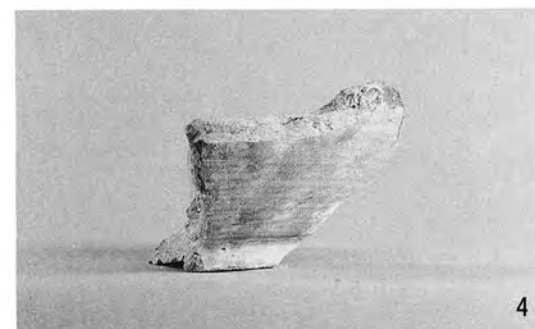
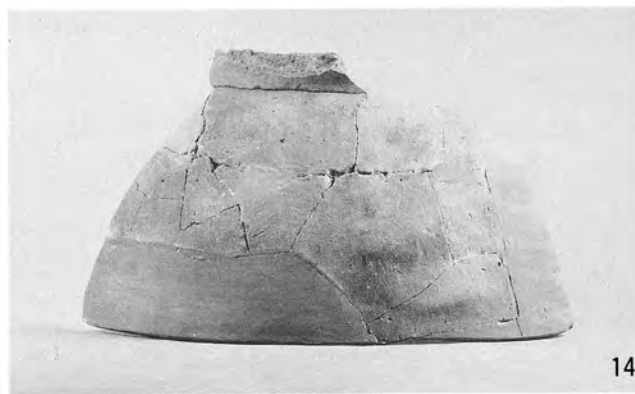
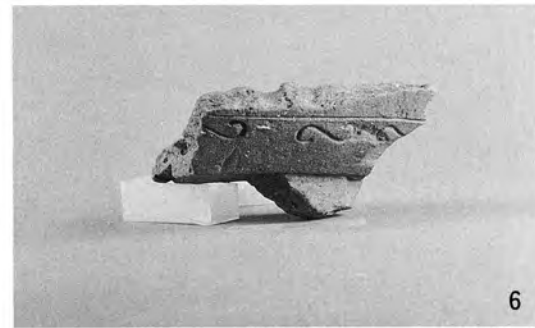
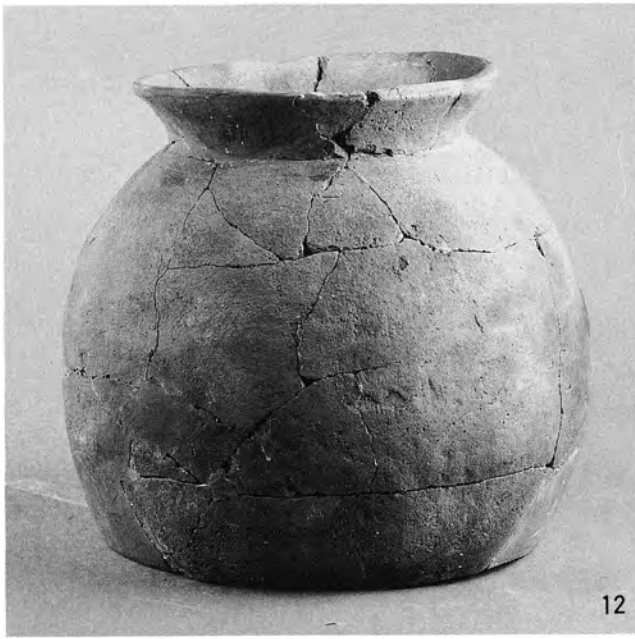


第1 (19)・2号住居跡出土土器 (1~9)

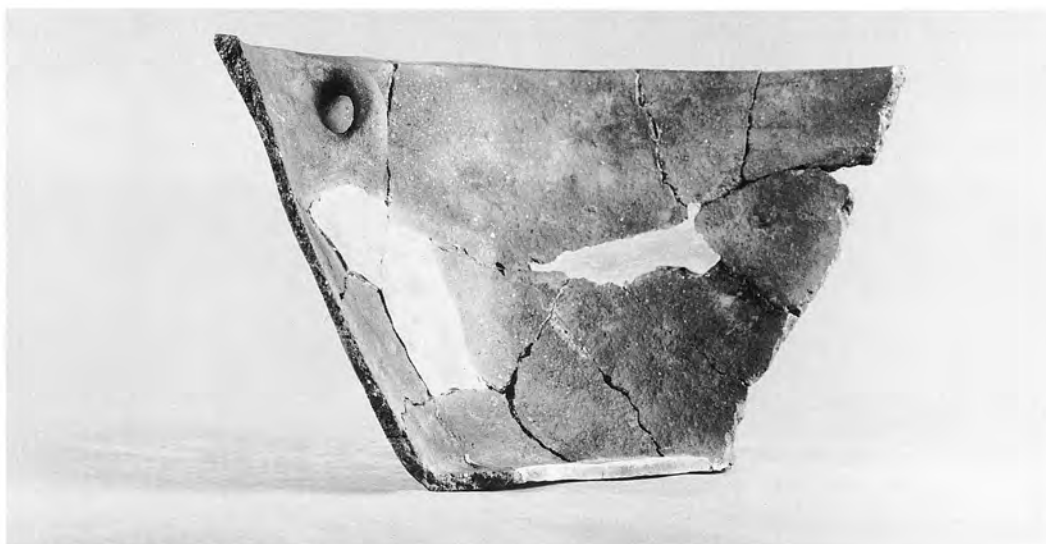




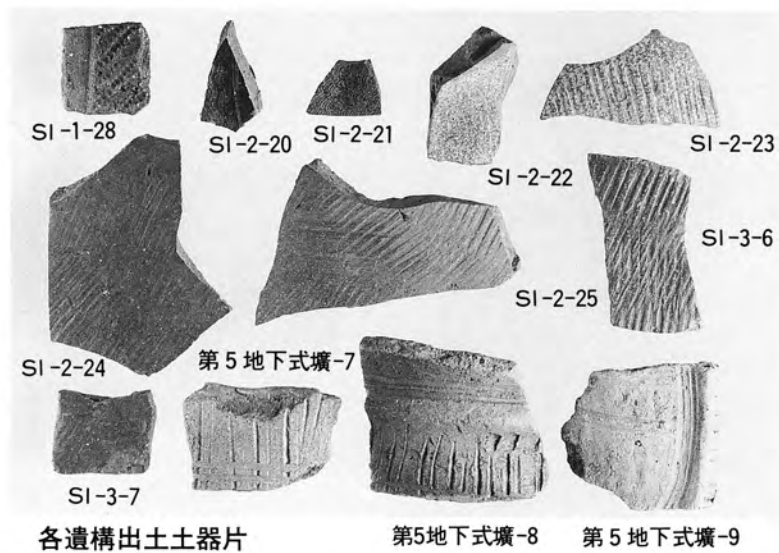
第2号住居跡出土土器

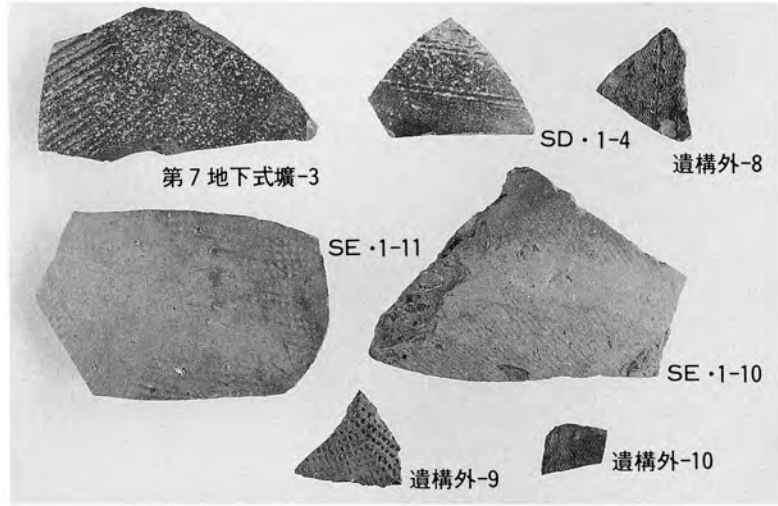


第2号住居跡 (12~16), 第1号井戸 (5・6), 遺構外 (1・4) 出土土器

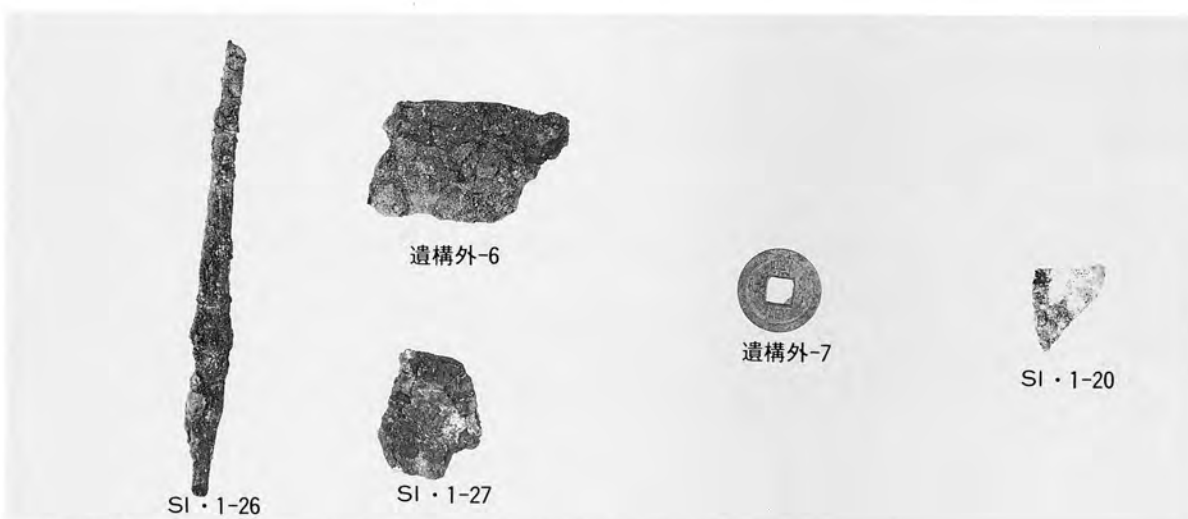


第 8 号地下式壙出土土器





各遺構出土遺物（須惠器片，石器・石製品）



各遺構出土遺物 (石器・石製模造品・金属製品・古銭・土製品)



作業風景

茨城県教育財団文化財調査報告第91集  
茨城県県西生涯学習センター  
建設用地内埋蔵文化財調査報告書

野 殿 深 作 遺 跡

平成6（1994）年6月25日 印刷  
平成6（1994）年6月30日 発行

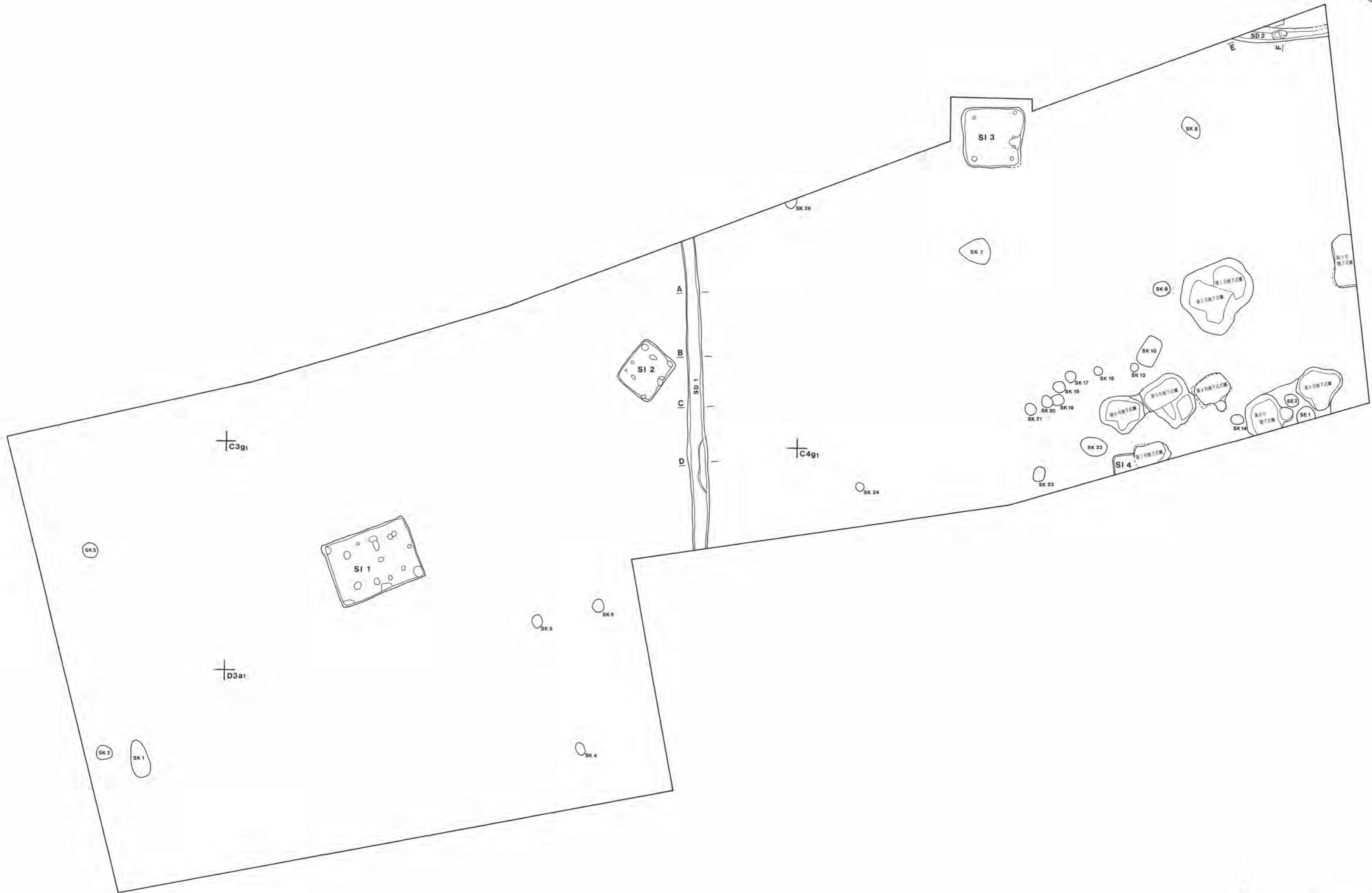
発行 財団法人 茨城県教育財団  
水戸市見和1丁目356番地の2  
T E L 0292-25-6587

印刷 ワタヒキ印刷株式会社  
T E L 0292-21-4381

附 図

茨城県教育財団文化財調査報告91集

野殿深作遺跡



附図 野殿深作遺跡全体図





